
胡蝶翼譚 想依儂輝

桜惡夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

胡蝶翼譚 想依儂輝

【Zコード】

Z2435P

【作者名】

桜惡夢

【あらすじ】

物語は終端を迎えた。

外史の“鍵”は失われ

外史の“起点”は満ち

外史の“語り手”は世界を導き消え去

つた

しかし、その終端は始まりへと繋がる。

新たな外史へ。

プロローグ（前書き）

はじめまして m(—) m

桜悪夢と申します。

この作品は魏ルートENDから派生しています。

オリキャラも多少は出ると思いますが…
基本的には少ないです。

可能性な限り原作に添つて紡いで行きたいかと。

また更新は不定期で遅いと断言しておきます。
御理解・御容赦下さい。

それでは

新たな扉を開きましょう。

プロローグ

夜の帳が天と地を抱き
深い静寂が支配する。

しかし、其処に在り感じるのは恐怖ではなく安寧。
孤独ではなく独占。

何氣無い 他愛無い話。

それなのに、綴られる詩の様に輝いて感じる。

特に選んでいる訳でもない稚拙な言葉でさえ…

大切に思える。

悩み等、何もかもを忘れてしまいそな程に心地好い雰囲気が包む。

だからだろうか…

気が付けば夢中で喋り…

いつの間にか途絶えた隣の相槌が気になつた。

焦燥と不安に心が騒ぐ。

視線を向けて見れば

俯いたまま、ジッ…と地を見詰めている。

一瞬の安堵の後、呆れた。

小さく溜め息を吐くと声を掛けてみる。

が、反応は無い。

再度、声を掛けるが…。
それでも反応しない。

声量を上げ、名前を呼ぶ。

しかし、反応しない。

軽い苛立ちから声は自然と怒氣を孕む。

呼ぶ、呼ぶ、呼ぶ

何度も、何度も、何度も、何度も

“彼”が“私”に

気付くまで

「……す……か……と……一刀つ！」

「え？」

本の少し何方らかが身体を傾ければ重なり合つ距離で並んで座つて
いるのに……

耳元で大声を出して漸く気付いた。

見開かれた黒い瞳に自分の顔が映つている。

「……」

無言のまま、此方を向いた双眸を射抜く様な眼差しで見詰める。

けれど、締まりの無い顔は間抜けとしか言えず
芽生えた筈の怒りは簡単に萎えてしまう。

かと言つて赦す様な笑顔は絶対に見せない。

自分の誇りが

いや、在り方が許さない。

「え」と

氣不味氣に頭を搔きながら視線を他所へと逸らした。

大方、別の事を考えていて話は聞いていなかった
そんな所だろ？

「私との話の最中に他の事を考えるなんて…
随分と良い度胸ね？」

「…………」

獲物を前にして舌舐め擦りする様な狡猾な笑みを浮かべて見せる。

臆した表情を見せるが…

それは一瞬の事。

その心は揺れていない。

彼の心を激しく揺らす事は実はかなり難しい。

「…………」めん、華琳」

観念して素直に謝る。

そういう所が彼の美点でもあり、魅力の一つ。

「全く、貴男ときたら…」

呆れながらも触れ合つ身体を離す事はしない。
寧ろ、その肩に頭を預けてしなだれ掛かかった。

「それで？」

「…ちょっと、思い出したんだ」

いつもの様に“お見通し”とばかりに訊ねた。

何処か物憂げな彼の視線に釣られて追つと

蒼黒の天の星の中に浮かぶ琥珀色に輝く月が在つた。

琥珀の月

ただそれだけの事なのに、ズキッ…と胸が痛んだ。

「俺は何の為に“此処”に来たのか
「何を言ひうかと思えばくだらない」

彼の言葉を遮る様に憎まれ口を叩く。

驚く彼の瞳が私を見詰めているが私は眼を瞑る。

「貴男にそんな余裕が有ると思っているの?
戦が終わっても休む暇など私達にはないのよ?
寧ろ、これからが本番。」

各街道の整備、開墾作業、治安維持の強化。
それに経済の発展にも力を入れたい所だわ」

彼が反論が出来ない様に、矢継ぎ早にそれらしい理由を並べ立てる。

「…華琳は凄いな」

感心した様に彼は呟く。

「私を誰だと?」

余裕と風格の笑顔を浮かべ瞼を開き振り向く。
本心は決して見せない。

「魏の霸王　　曹孟徳」

彼は両の眼を細めながら、穏やかに微笑む。

普段はちょっと頼りないが時折見せる強さと優しさ…
そして包容力。

鋭い様で鈍く…
初な様で大胆。

相反する側面が彼の魅力をより際立たせている。

「そう 私は霸王」

ドクンッ…と胸が高鳴る。

此処が運命の選択だと
“私”は知っている。

「だから
(でも)

けれど、食い違つ声と心。

「私は何も…後悔しない」
(貴男に側に居てほしいの)

彼は寂し気な

それでいて穏やかな微笑みを浮かべる。

「ははっ…華琳らしいな」

そう “あの時” だつて彼は笑っていた。

自らの行く末の判つている状況の中でさえ…
決して揺れ惑う事無く。

だから、気付けなかつた。

失うまで…その大きさに。
その大切さに。

その儂さに

(違つう…、違つうのう…)

取り戻したくて…
失いたくなくて…

ただただ、必死に求める。

けれど、心の叫びは届かず、彼の温もりが離れてゆく。

同時に虚空へ落下していく様に“私”が遠ざかる。

（待つてつ！

もう少しだけ待つてつ！

お願ひだからつ！）

彼と自分へ右手を伸ばし、必死に足搔く。

けれど、互いの距離はただ広がる一方。
ビビビんと遠ざかる。

「愛してるよ、華琳……」

耳元で囁かれれば身も心も溶かされてしまつ葉。

けれど、それさえも今では幻の様に儚く響く。

そして聞きたくない一言が彼の口から零れる。

「さよなら
寂しがり屋の女の子」

「一刀つ！」

大きく見開かれた双眸。

宝石の様に美しい青い瞳は大粒の水滴を湛える。

視界はボヤけてはいるが…

此処が何処なのかは直ぐに判る。

見慣れた天井…

見慣れた天蓋…

自分の部屋に他ならない。

「……またあの夢……」

虚空に向け伸ばされていた右手を下ろし、目元を隠す様に視界を塞いだ。

右腕に感じるのは冷たさ。

頬を流れても…

瞳から零れていても感じる事がなかつたのに…

“涙”は溢れる。

求めるのは

冷たい涙ではなくて…

温かな涙。

照れ隠しに愛剣を振り翳し大声を上げる彼女

逃げながら“不条理だ！”と叫ぶ彼

その様子を見ながら辛辣な言葉を浴びせる彼女

止めるかどうか真剣に悩む妹分な彼女達

のんびりしている様で時折火種を放り込む彼女

彼の事を敬い慕いながらも囁き立てる彼女達

彼と姉の姿を笑顔で見詰め楽しそうな彼女

酒瓶を手に笑いながら彼を激励する彼女

呆れながらも心地好さ気に微笑む彼女

そして

そんな“いつも”の光景を見詰めている私

馬鹿みたいに騒がしく…

当たり前の様に皆の笑顔が溢れていて…

些細で、くだらない事さえ眩く輝いて見える…

彼の居た

彼と共に在った日々。

(……一刀……)

心中で呴いただけで胸が締め付けられる。

痛みに押し潰され、今にも泣き出してしまう。そりだ。

“あの月夜”の様に全てを晒して泣き叫べば……
もしかしたら、本の少しほは楽なのかも知れない。
けれど

「……泣くな、曹孟徳……」

私は自らを厳しく律する。

私は誓つた。

彼が居た“証”を守ると。

私は誓つた。

彼が居ない事を悔やむ様な世界を築き上げると。

私は誓つた。

彼を愛する者達の
彼が愛する者達の

笑顔を絶やさないと。

（……………そう
だから、私は泣かない…
泣いてはいけない…）

彼は自らの“存在”を削り私に未来を託してくれた。

在るべき流れの道を外れ、この世界の未来は“未定”となつた。

彼にも、誰にも解らない。

ならば、私が綴る。

“私の物語”の中へと彼が現れたのなら…
私は未来へと書き続ける。

彼が紡いだ様に
彼を忘れぬ様に

彼に繋がる様に

視界を塞ぐ右腕。

力無く、無造作に開かれたままたつた掌。

私は意志を込めて強く握り締める。

そのまま右腕で涙を拭い、身体を起こした。

差し込む朝の光に誘われて窓へと眼を向ける。

まだ明けきつていない…

いつも変わらない朝。

「…習慣も考え方のね」

苦笑しながら両手を付いて寝台から抜け出す。

僅かに軋んだ寝台から立ち上ると、寝間着の乱れを整えながら窓際へと歩く。

硝子越しの景色

まだ、靄の掛かったままの真っ白な世界が陽光を浴び徐々に色付く。

耳を澄ませば小鳥の轉りが聞こえてくる。

右手を伸ばし窓を開ければ部屋の中へと冷たい空気が流れ込む。

起き抜けの身体と意識には丁度良い刺激。

それを感じながら瞼を閉じ両手を頭上で組み、大きく伸びをする。

「…………んーっ…………」

自然と心身共に田覚める。

瞼を開けば視界に見慣れた景色が映る。

今日も私は生きている。

今日も私は此処に在る。

それを強く意識する。

「 もう、今日も忙しくなりそうね」

そう呟いて空を見上げる。

まだ白さを纏う青。

見果てぬ“夢”を想い描き小さく微笑み

今日を迎える。

第一話 天へと讐え！

陳留

魏の首都であり霸王の城が在る街は今、賑わいを見せ其処彼処で人々が動き回る姿を見る事が出来た。

笑顔と活気が満ち溢れる。
願い、求めた平和だ。

「…ねえ、見えてる?…」

天に向かい、ぽつりと呟くその言葉。

それは誰の耳にも届かずに喧騒に飲まれる。

そう、届く筈がない。

届けたい相手は

もう傍に居ないのだから…

(.....馱目ね.....)

判つていても、油断すると直ぐに“蓋”が緩む。

小さく苦笑し視線を戻すと通りを元気に走る子供達を見付け眼を細める。

こんな光景を見るも随分と久し振りな気がする。

大陸統一、三国同盟の発足から早半年

直後は“戦の事後処理”に追われて書簡や竹簡を睨む日々が続いた。城の外へ出るのは一ヶ月に一度開かれる三国会場のみといつ生活をしていた。

霸権を争い戦場を駆け巡る日々が懐かしくさえ感じる程に忙しくけれども、漸く掴み取った“平和”への“始まり”を放棄する様な真似は絶対に許されない。

否 私が許さない。

ただそれは“霸王”としてではない。

あの乱世を戦い生き抜いた者として…
あの乱世の表も裏も知る者だからこそ…
現在に在る平和を守らなくてはならない

「此方でしたか、華琳様」

不意に呼ばれ、思考を中断して現実へと戻る。

真名を呼ぶ聞き慣れた声。

直ぐに誰だか判る。

「秋蘭、何か有ったの？」

賑わう人々を見詰めたまま振り向かずに訊く。

「先程、呉蜀から先触れが到着しました
後一刻程で到着の予定と」

「そう…準備の方は？」

「滞り無く」

それを聞いて安心する。

主催する側が遅れていては招待者に失礼だ。

何より、相手は同盟国。

同盟発足後、三国会議以外の場に初めて集まる。
同時に初めて二国の主力が一堂に会する。

無様な姿は見せられない。

「秋蘭、人手は足りてる?

必要なら一時的に警備から回して構わないわよ?」

「其方らは大丈夫かと…

予定よりも作業は順調で、宴の会場の方も準備は概ね完成しております」

いつも通りの声色と口調で答える秋蘭。

だが、無意識にだろう。本音が溢れていた。

(“其方らは”…ね)

やはり問題が有るとすれば私達なのだろう。

街並みから青空へと視線を移して見上げた。

三国同盟発足と戦争終結の祝宴を兼ねた大祭。

それは

“天遣想祈祭”と銘打つた“彼”への感謝祭。

私達は勿論

武官・文官や兵士、魏の民全てが彼を敬愛している。

魏の霸王も、呉の小霸王も蜀の大徳でさえも…
彼の代わりは出来ない。

失つて初めて知つた。
彼の存在の大きさを。

霸を実現した筈の曹魏。

けれど、終戦の後に有つたのは深い悲しみ。

戦であれば命は失われる。
敵味方問わず、多くの兵が命を散らした。

それでも、此処だけは…
彼が居た魏だけは…

あの乱世の中でさえ笑顔が絶えずには在つた。

霸王や小霸王の様に武勇で安寧を齎す訳ではなく…
大徳の様に理想という甘い蜜を与えるでもなく…

ただ、全てと向き合つ。

悲しむ者が有れば、理由を聞き共に泣き…

苦しむ者が有れば、理由を聞き共に苦労し…

手を差し伸べ、共に立つ。

“優しさ”という名の毒を与え、頼り縋り喚くだけの何もしない愚かな者を生む様な真似はしない。

人として在るが仮に…

彼は全てと向き合つた。

だから皆、彼に惹かれたのだろう。

常に相手の事を第一に思い考えて行動する。

悲哀も、憤怒も、苦痛も、憎悪も、全て…
彼は笑顔へと導いた。

一人一人が、自らの笑顔で生きていられる様に。

いつの間にか彼は魏の支柱になつていた。

だから、彼の“帰郷”には皆が涙した。

けれど、彼は魏の支柱。

悲しみに頭を垂れて踞り、立ち止まつていた皆に顔を上げさせ、進ませる。

彼が蒔いた“種”は涙雨を糧にして芽吹く。

何度も踏まれても腐る事無く真っ直ぐに育つ強さを持ち笑顔という花を咲かせる。

魏に於いて彼はただの御輿ではない。

今の魏の“父”と呼べる。

そして、彼が父ならば…

私達 私は“母”として“子”を育もう。

彼の遺した“未来”という大切な子を。

その為に

悲しみは胸の奥底に仕舞い蓋をする。

喻え忠臣達から恨まれ様と見限られ様とも構わない。

厳しく律し、激を飛ばす。

彼が嘆き悲しまない様に。

それが私の役目と信じじて。

一ヶ月もすれば他の娘達も覚悟が出来た。

彼は守り、築き、託した。
それを裏切らない為に。

悲しみに暮れた時間を取り戻す様に働いた。

城の者も、兵も、民も…
皆が“未来”へと進む。

彼の居た“証”

魏に咲き誇る花を大陸へと咲き広げる為に。

我等の志は一つとなつた。

けれど、心の傷痕は癒えず今も尚膿み続ける。

私達の中で

「秋蘭、急ぎの用は?」

私は秋蘭へと振り向く。

「特に」

「そ、なら私は少し散歩でもしてくるわ
貴女達も最終確認と指示を出したら“準備”なさい」

「はつ……」

秋蘭は言葉の意味を即座に理解して答える。

「春蘭と桂花には私の事は探さない様にと」

「御意」

あの娘達の行動を読み先に手を打つて置く。
邪魔をされでは私も困る。

秋蘭に指示を出して人混みの中へと私は消える。

華琳様の背中を見送る。

「…準備、か…」

先程まで華琳様が見上げていた空を見詰める。

やはり、自分では隠してゐつもりでも気付かない内に“蓋”が緩んでいた様だ。

(……なあ、一刀…)

私達は 私はどうすれば良いのだろう?)

静かに胸の中で訊く。

が、答えは返らない。

(華琳様も姉者も皆も…
私もお前に会いたい)

氣を抜けば涙となつて溢れ出てしまつた。

しかし、私は泣いてしまつた訳にはいかない。

華琳様から彼が消えた事を聞かされた夜

私達は泣き崩れた。

どうして?
どうしてだ?

戦いが終わり、これからが本当にお前の存在が必要になつてくれるの
に…

お前は言つたではないか…

終戦後にこそ治安と平和を維持する備えが要ると…
その為の警備隊だと…

なのに何故、私達の前から去つてしまつのだ…

どうしてだ… 一刀

私は姉者に縋り付いて泣き叫んでいた。

霞も、風も、凪も、稟も、真桜も、沙和も、季衣も、流琉も、桂花
でさえも…

ただただ、泣いていた。

泣いていなかつたのは…

華琳様と 姉者。

姉者は泣かなかつた。

泣く私達を胸に抱き締め、静かに背中を、頭を撫でてくれていた。

暫くして、私達の泣き声が小さくなつた時…

皆に声を掛けたのは華琳様ではなく姉者だつた。

「聞け、魏の忠臣達よつ！
泣きたければ泣けつ！
だが、下を向くなつ！
歩みを止めるなつ！」

我等には成せねばならぬ事が有るのを忘れるなつ！

死んでいった者達の為にも掴み取つた平和を守り繋ぐ責任が有るつ！

もう一度と、同じ悲しみが繰り返されぬ為につ！
繰り返せぬ為につ！

我等は折れではならんつ！

我等だけが

一刀の志を継ぎ叶えられる事を心せよつ！

姉者の言葉に皆が

華琳様でさえ眼を見開く。

言葉と共に叩き付けられる鬪氣が意識を揺らす。

嫌でも言葉の意味を理解し胸の奥に熱い炎が灯る。

「春蘭の言つ通りよ」

華琳様が姉者に続く。

「一刀は最後の一瞬まで、私達を信じ想つていた…
いえ、今もそうでしょう
それは誰よりも私達自身が知つてゐる
ならば、我等が成すべきは一刀の志を絶やさぬ事…」

華琳様は言葉を切り私達をゆっくりと見回される。

華琳様は“絶”を手にし、右腕を掲げられた。

「誓え、己が心につ！

悲しみは直ぐには癒えないだろつ…
だが、決して折れぬとつ！

誓え、己が想いにつ！

愛する者が信じ託した未来を守り育む事をつ！

此處に私は誓おうつ！

一刀が居ない事を悔やむ様な未来にするとつ！

華琳様の宣言に胸が高鳴るのを抑えられない。

「私は誓おうつ！

我が大剣は我が主の為…

そして一刀の託した平和を守る為、あらゆる敵を討ち倒さんとつ！」

姉者が“七星餓狼”を掲げ華琳様の“絶”に重ねる。

それで十分だつた。

一人、また一人と…
誓いを立てる。

そして

『我等は此處に誓うつ！

北郷一刀の灯した“光”を消して絶やさぬ事をつ！』

十二人の乙女は誓う。

“天の御遣い”ではなく、“愛する人”北郷一刀に。

だが、簡単には拭いきれず全員が立ち直るには一ヶ月もの時を要した。

私はあの夜に立ち直った。

しかし、本当の意味で心を決めたのは一週間後の夜。

その日の昼間

急ぎの仕事から姉者を探し一人で森に行つたと聞いて向かつた。

姉者にしては珍しいなとは道中で思った。

姉者を探しに森へ入つて…

私は見てしまった。

大樹の幹を叩きながら泣く姉者の姿を。

一刀の名を呼びながら泣きじゃくる姉者。

堪らず私の方も涙が溢れ、私は姉者に声を掛けられず引き返した。

その後、森の出口付近にて平静を装い声を掛けた。

姉者が賊の討伐に出た為、久し振りに一人きりの夜を迎えていた。

気分転換も兼ねて片付けをしていた時だった。

それを見付けたのは、

姉者にしては珍しい…

洒落た布袋を態々用意して大切に仕舞われた竹簡。

“春蘭へ”

其処に書かれていた文字を見忘れる事はない。
見間違う事もない。

それは一刀の筆跡だった。

私は自分を抑えられず中を見てしまった。

其処に書かれていたのは…

あの日の姉者の言葉

そして、一刀からの最初で最後の願いだった。

『春蘭へ

これを読んでる頃には俺は消えていると思う
杞憂で済めば笑い話だけど嫌な予感は当たる物…
だから、頼みが有る

本当なら華琳がすべき事と思つけど…

多分、無理だと思う

だからひ、春蘭が代わりに支えてあげて欲しい

俺は皆に笑顔で居て欲しいけど何も出来ない

最後に遺せるのは

皆への激励の言葉だけ

損な役回りだけど…

頼めるのは春蘭しか居ない

俺の代わりに、華琳と皆を支えてあげて欲しい

最初で最後の“お願い”がこんななのだけど…

俺らしいかな？、なんてな

追伸

喻え、世界から俺の存在が消えたとしても…

俺の中には皆と共に歩み、過ごした日々は刻まれてる

何一つ絶対に忘れない

誰にも奪わせない

俺が消えても消させない

いつまでも君を愛してゐる

いつまでも君を愛してゐる

我が愛しき人 春蘭へ

北郷 一刀

竹簡を持つ手が震える。

姉者だけが手紙を貰つた事に嫉妬して?

姉者だけが一刀に信じられている事が悔しくて?

姉者だけが特別に愛されている様な気がして?

否 何も否だ。

「...私は馬鹿だ...

大馬鹿者だつ！」

思わず大声が出る。

だが、周りを気にする余裕はなかつた。

「姉者にとつては華琳様が一番だから大丈夫?
何を勝手な事を…
姉者の事だから判つてる?
何も判つていなかつたのは私の方ではないか…」

あの時の姉者は
泣かなかつたのではない…
泣けなかつたのだ。

一刀から皆の事を託され、支えなければならぬ。
だから、姉者だけ泣く事が出来なかつた。

それが、何れ程辛いか…
皆と一緒に泣ければ何れ程楽だつたか…
想像するだけでも苦しい。

現実には 想像の比ではないだろう。

そして、あの時の言葉…
その最後を見て気付く。

我等だけが

一刀の志を継ぎ叶えられる事を心せよつ！

そんな言葉は
何処にも書かれていない。

あれは

私達の 私の心を衝いたあの一言だけは

紛れもなく

夏侯元譲の言葉。

よく見れば竹簡には水滴が滲んだ跡が有る。

恐らくは集まる前に一人で泣いたのかもしねない。

挫けそうになつた時

一人で読み返して泣いたのかもしねない。

「……………そうか、姉者…
ならば私も共に行こう」

その夜

夏侯妙才は心を決めた。

記憶の中から現実へと戻り暗黙に包まれる。

（誓い、そして歩む…
だが、言つ程簡単ではないのだがな…）

こんな時、彼ならどうするだろうか…

何と無く考えてみる。

“ん~… そうだな…

悩んでも仕方無いのなら成る程に任せよう
で、自分が後悔しない様に自分のしたい様にするわ”

そう言つて笑つている彼が脳裏を過つた。

そんな会話をした覚えなど無かつたが…
何故か確信出来る。

「……ふつ、そうだな…」

小さく笑みを浮かべ秋蘭はその場を後にした。

華琳様を探しに行つた筈の秋蘭から指示を受けた。

「準備つて言われても…
何をすれば良いのよ?
おまけに…
華琳様を探すなつて何?
私に対する嫌がらせ?」

愚痴る様に呟きながらも、足は自然と其処へと向かい歩いていた。

扉の前で深呼吸し…
扉を静かに開ける。

主を失つた筈の部屋。

なのに、其処には“彼”的匂いと痕跡が残る。

「……」

特定の者以外は入る事さえ禁じられている。

可能性な限り、彼の痕跡を皆が遺したいのだ。

「……奇妙な物ね……」

痕跡を遺す

しかし、放置すれば空気は汚れ黴が生えるだらうし……
異臭も漂う可能性が有る。

だから、定期的に窓を開け風を通して換気する。
布団や衣服も洗い干す。
勿論、掃除もしている。

主な担当は秋蘭と流琉。

時折、風や稟……

それに私も手伝つ。

あれから半年も経つのに……
この部屋だけは時の流れが止まっている様に思つ。

どれだけ換気しても……
どれだけ洗濯しても……

彼の匂いが失われる事など一度も無かつた。

「……全く、これだから全身白濁液男は……」

匂いを残す位なら消えたりなんかしないで欲しいわ」

そう言いながら、私は彼の使っていた寝台へ座る。

ぽふつ…と倒れてみれば、彼の匂いが鼻孔を擦る。

「……何で消えたのよ…」

問い合わせる様に咳きながらゆつくりと瞼を閉じる。

いつからだらうか？

あんなに嫌いな男なのに…

華琳様に近寄る蟲なのに…

私は彼の事を

好きになっていた。

最初に会つた時は華琳様の真名を呼ぶ命知らずな馬鹿だと思つた。

けれど、彼は私よりも後に来たのに…

私より先に華琳様に真名を預けられていた。

その事に嫉妬心が無かつたとは言わない。

だがもしも、私の方が先に華琳様から真名を預かつてていたとしたら…

「……変わらないわね」

寧ろ、より嫌つていたか。

けれど

“好きにならない自分”を想像する事が出来ない。

それ程までに私の中で彼が大きな存在になつていて。

薄々は気付いていた。

何だかんだと言いながらも彼と肌を重ねてゐる時…
私は自分が“女”だと感じ素直に喜びを覚えた。

多分 春蘭や秋蘭、稟も同じではないだらうか。

自覚したのは あの夜。

華琳様の口から“消えた”と聞いた時だ。

唖然とする一同。

華琳様が再度告げると眞が泣き、喚き、嘆いた。

そんな中

私は口角を上げた。

「くくく…

漸く私の目の前から消えてくれたのね

くくく、あはははははっ！

これで華琳様が穢される事もないわっ！

あのド変態鬼畜全身孕ませ種馬変態男の顔を見なくて済むなんて
まるで夢の様だわっ！……！」

私は此処ぞとばかりに声を上げて嘲笑し罵倒する。

だが、いつもなら風辺りが反論しそうなのに何の声も返って来ない。
場の空気を読め?
だから、言つてるのよ。

あんな変態の所為で折角の祝勝気分が台無しよ。

無理矢理にでも変えないと不味いじゃないの。

じゃないと

じゃないと？

「桂花」

不意に春蘭が私を呼ぶ。

秋蘭を、季衣を、流琉を…その腕の中に抱き締めて。

私を静かに見詰めている。

「な、何よ？」

私は何故か動搖した。

そして、腕を引かれる様に春蘭の元へ足が進む。

“何故？”という疑問すら頭に浮かんでは来ない。

「我慢するな」

「…！」

その瞬間、私は理解した。

認めたくない。

けれど、認めてしまう。

私は
北郷一刀を愛していると。

「う　うわあああああああああ――――――――――」

堰を切つた様に感情が溢れ出した。

私の頭の中は唯一人の事で塗り潰される。

「なんでよつ！？」

勝手に人の中に入り込んで来たくせに、なんで勝手に居なくなるのよつ！？

馬鹿　　馬鹿ああつ――――――

私は他の三人と共に春蘭の腕の中で泣き叫んだ。

「……くつ、私とした事があんな失態を晒すなんて」

今思い出しても悔しい。

後で真桜達から聞いたが、私は嘲笑し、罵倒しながら泣いていたら

しい。

なんて無様な姿だらう。

「…全部アンタの所為よ」

此処には居ない部屋の主を恨み呪う様に呟く。

私は悔しかつた。

泣いた事よりも

自分の全てだと思っていた華琳様の事をえ忘れ
唯一人の男の為に心を痛め泣き叫んだ事が。

華琳様ではなく

彼が私の全てを塗り替えて私を泣かせた事が。

そして

気付くのが遅すぎた事が。

だから、願う

「…早く帰つてきて責任、取りなさいよね…」

その弦きは優しく、儂く、寂し気に空氣に融けた。

「はああああーっ！」

「せええええーっ！」

ガギンッ！と鋭い金属音が練習場で響く。

撃ち合つは“七星餓狼”と“飛龍偃月刀”

「甘じぞ霞つ！」

「春蘭！」

春蘭と霞が…割つと本氣で手合わせしていく。

「ならば

「ればどりだーっ！」

春蘭は鍔迫り合いを押して右足に体重を乗せて身体を捻り左から真横に薙ぐ。

霞は柄を立てて受け

勢いを殺さず利用し偃月刀を半回転させる。

「おおっ！？」

受け止めるだらうと思つていた春蘭は体勢を崩す。

霞は更に半回転させ切つ先を春蘭に突き付ける。

だが

春蘭も負けてはいない。

体勢を崩されながら剣先を地面に突き立て前のめりになりつつ勢いのまま左足で地面を蹴つた。

「なあっ！？」

「ボンッ！」と風を斬つて春蘭の右足が無防備な霞の顔を掠めた。

霞が咄嗟に上体を左後ろへ反らしていなければ元壁に顎を捕えていただろ？。

春蘭は剣を軸に一回転して着地と同時に身体を沈めて一気に駆ける。

霞は横に一回転しながら、偃月刀を振り抜く。

ガギンッ！と両の刃が撲ち合つが
春蘭は止まらない。

霞の攻撃を往なしながら、偃月刀に刃を沿わして更に深く踏み込む。

勝負の分かれ目。

押し切れば霞の勝ち。
踏み凌げば春蘭の勝ち。

勝負の行方は

ギヤギンッ！

七星餓狼が宙を舞つた。

回転してザンッ！と地面に突き刺さる。

『……』

静かに互いを見据え

両者は同時に口元に笑みを浮かべた。

偃月刀の柄は春蘭の左肩口の上で止まり

春蘭の手刀 突きは霞の喉元で止まっている。

「…引き分けか」

「…引き分けやね」

“ やれやれ… ” と肩を竦め一人は衣服に着いた土埃を払い落とす。

「 … 春蘭はええの? 」

剣を抜いている春蘭に霞は訊ねる。

「 … そつとお前にかどつなのだ? 」

春蘭は “ 何が ” とは訊かず逆に訊き返す。

「 ウチか? 、ウチは…
まあ、大丈夫やろ」

「いい加減だな…」

「いやいや、春蘭にだけは言われとうないで

「何だとおつ！？」

暫し、いつも通りの慣れた遣り取りをする。

練習場を後にし

二人は城壁の上に立つ。

遙かな地平を並んで見詰め風を感じる。

「……ウチな、約束した

いつか一人で羅馬に行くて約束したんよ

霞は静かに呟く。

「…私も約束したな

戦が終わっても私達の元を離れない、と…」

春蘭も静かに呟く。

城内と街の喧騒は一人には届いていない。

今はただ、互いの声だけが耳に届くのみ。

あの夜

霞は泣いた。

華琳の言葉を聞き泣いた。

頭の中も、心の中も…
ぐちゃぐちゃになった。

判るのは悲しいという事。
ただ、それだけ。

春蘭の言葉が
華琳の言葉が

見失つていた自分の想いを思い出させてくれた。

もしも、一人が居なければ納得が出来ずに飛び出して一刀を探し回つただろう。

そして、野垂れ死んでいたかもしけない。

多分

凪や真桜、沙和も同じ様な状況に有つただろう。

それ程までに一刀の存在は大きいのだから。

けど、今は違う。

泣いてても何も変わらないのなら
自分の意志で変えて行けばいいだけの話。

次に泣くのは
再会の嬉し泣きと決めた。

あの日

春蘭は料理で汚れた衣服を着替えに自室に戻った。
其処で竹簡を見付けた。
中を見て驚く。

一瞬、華琳様に報告しようかとは思つたが…
それは止めた。

悪戯でこんな真似はしない事を知つてゐる。

ならば、私の答え一つ。

一刀の想いに

その願いに応えるだけ。

蜀の侍女が華琳様の召集を伝えに来るまで必死に読み台詞を覚え様
としたが…
頭に入らなかつた。

だが、召集を聞いた途端に全てが頭に入つた。

それは多分、私が信じたくなかったからだろう。

そして 覚悟が決まれば心は静かになつた。

華琳様の表情を見て一刀が私に頼んだ理由が判つた。

恐らく

いや、間違ひ無く華琳様は泣いていたのだろう。

いつもの私なら気付く事もなかつただろう。

だが、今は判つてしまつ。

そして、華琳様から一刀が消えた事を訊き
皆が心を痛めている事も。

秋蘭や稟、桂花まで自分を見失い泣きじやぐる。

まるで子供の様に。

ふと目を向ければ華琳様は俯いたままだつた。

だが、その手は強く握られ身体が小さく震えている。

霸王の姿は其処には無い。

在るのは

“華琳”という名の一人の少女の姿だった。

一刀は

一刀だけが判つていた。

彼女は自分の“弱さ”など誰にも見せない。

だが、本当は違う。

彼女は見せ方を

“甘え方”を知らない。

だから、この“役目”には私しか居ない。

他の誰にも務まらない。

皆が落ち着くのを待つ……

私は一世一代の“演技”の幕を上げた。

悲しくないと言えれば嘘だ。
私は必死に自分を騙した。

この夜だけは
私は泣いてはいけない。

そう心に誓つて。

その後

反動、とでも言つのか…

今でも時折、どうしようも無く涙が溢れる事がある。

ただ

あの時の心の静かさは…

私を少しだけ成長させた。

次に一刀に会う時は

秋蘭の様に落ち着いた私を見せてやるつと思つ。

春蘭と霞は互いへ顔を向け穏やかに微笑む。

心は静かに
けれど、熱い炎を宿す。

そして、霸王が見せる様な悪戯な笑みを浮かべた。

「約束は守らせんとな」

「ああ、守らせないとな」

二人は蒼天を見上げ
刃を重ねて掲げる。

「覚悟しどきい…

女を待たすと高う付くで」

「しつかりと償え…

我等の流した涙の代価を」

まるで、罪状でも読む様に静かな声で言ひ

『その人生を賭してつー』

二人は声も高らかに叫ぶ。

それは宛ら

天と神に対する宣戦布告。

そう

彼女達の戦いはまだ

終わっていない。

第一話 星の導き手

陳留近くの森

鬱蒼と茂る木々の回廊。

森を抜ける山道ではなく、少し入り組んだ山道を抜け僅かに外れる
と

其処に出る。

側を小川が流れ、少しだけ淵の様になつた場所。

水深は膝上程度なので夏は水遊びにも向いている。

だが、今は冬。

時期的には厳しい。

特に草花等が群生している訳でもなく…
絶景が拝めるでもなく…

極めて平凡な場所。

最初は暇潰しの散歩で偶然見付けただけ。

けれど、今は特別な場所。

私と彼が

初めて結ばれた場所。

他の者も場所は知っているけれど理由は知らない。

大切な思い出の場所

そう言えば、余計な追究は誰もしなかった。

水辺に立ち

ふと近くの岩に皿を遺る。

この岩にも思い出がある。

「初めて連れて來た時は…
春蘭を出しにしたわね」

“春蘭の着替えを覗いた”事への罰と称し、この岩の上から川の中へ向けて突き落としてやった。

話を聞いた時、頭の中では策が組み上げ始められた。

まあ、その所為で報告会の最中に妄想に浸つてしまつ失態をしてしまつたが…

(…今思つと裏みたいね)

ちょっと複雑な気分だ。

ずぶ濡れになれば逆上して襲い掛かるか…
或いは奢めてくるか…

結果は後者だった。

だが、まだ策は有つた。

濡れて張り付いた衣服とか見える身体の曲線に欲情し襲い掛かる

“魏の種馬”と呼ばれる位だから、簡単に“誘い”に乗ると踏んでいた。

なのに

「……あの時は私の先見も甘かったわ…」

彼は照れて動搖していた。

けれど、一言で立場が逆になってしまつ。

私の方が羞恥に負けた。

つい、私は外方を向いた。

“薪を拾つてくる”と言い離れた隙に策を練り直す。

搦め手が通じないなら…

正面からの正攻法。

衣服を全て脱ぎ全裸となり戻つてくるのを待つた。

恥ずかしくなかつた訳ではないが…

それ以上に私の“想い”が高まり過ぎていた。

私は彼を求めていた。

戻つてきた彼は啞然として薪を落としていた。

顔を真つ赤にして…

だから揶揄いたくなつた。

挑発的に肢体を見せ付け、彼を揺さぶつた。

ただ、それが裏目に出る。
また私の方が負けた。

自分でも驚く程に

私は彼の言葉に胸が高鳴りそれ以上…
彼の顔を見れなかつた。

焚き火を起こすと、私達は背中合わせに座つた。

彼の背中は温かく…

そして、意外にも大きくて何処か安心した。

ただ、何故か不満だつた。

用意した策を悉く破られて悔しかつたのも有る。

彼の鈍感さに腹が立つ。

意外な己の初さに苛立つ。

けれど、本当は違う。

回り諄い遣り方しか出来ず受け身の自分が歯痒い。

情けなくて、もどかしくて仕方無い。

だから、あの時の会話では自分は妙に子供っぽくなり感情任せになつていた。

「……本当、馬鹿みたい……」

自分に素直になれば

彼は私を受け入れてくれ、より多くの時間と共に共有する事が出来たのに。

もしかしたら“現在”さえ違っていたかも…

彼は私の隣に居たかも…

そつ伸びてしまつ。

けれど、あの時結ばれず、更に戦時中故に焦らされたからだらう…

私の中で、自分の自覚より彼の存在は大きくなつた。

だから、今も彼への想いが死ぬ気のないだらう。

満たされない故に…

充分ではなかつた故に…

今も私は恋い焦がれる。

「…………重症ね……」

白嘲氣味に呴ぐ。

そう言えれば…

華陀も言つていた。

“俺に治せないのは

恋の病だけだつ！”

記憶の中でもえ暑苦しいが其處は日を瞑りつ。

華陀の言葉通り

恋の病は不治の病だ。

“特効薬”は有つても…

“治療法”など、何処にも有りはしない。

もしも、治るのなら…

その想いはその程度。

けれど、私は違う。

尽き絶えぬ故に不治
薄れ消えぬ故に不滅

貪欲な迄に
限り無く求め

蝴蝶の続きを翼う

「 情けないわね」

挫けそうな心を律する。

ただ願うだけで叶うのなら幾らでも願おう。

けれど、現実は夢の様には甘くない。

立ち止まれば全てが掌から零れ落ちてしまつ。

大切なモノ、全てが

彼を求めて、全てを失う。

それが私一人の問題ならば何も躊躇う事もない。

だが、私は魏の王。
大陸を制した霸王。

己が行いの全てに
己が歩んだ霸道に

責任を持ち、応えなければならぬ。

それこそが彼への誓い。

それこそが彼との絆。

だから私は

「貴女はそれで良いの？」

不意に掛けられた声。

私は静かに振り向いた。

ゆつくりと顔を左に向けて見れば、木の幹に背を預け此方を見てい
る者が居た。

(私が気付かなかつた?)

確かに思考に没頭していたから注意力は低下していただろう。

だが、全く気取れない程に油断もしていない。

なら、考えられる可能性は限られてくる。

優れた暗殺者や密偵か…
或いは妖怪の類いか…

だが、恐らく私よりも力が上の存在だろう。

私は半身の姿勢で対峙し、腰の後ろに隠し帶びていた護身用の剣の柄へと右手を伸ばす。

「あらあら…

誰も取つて食べたりしないから、そんなに構えないでくれない？」

諫める様な、けれど余裕の有る口調で言つ。

声から推測すれば女…

だが、全身を包み込む黒い外套が邪魔で相手の容姿ははつきりしない。

ただ、殺氣は無い。

「敵ではなさそうだけど…
油断して、殺されるなんて笑い話にもならないわ」

私は余裕たっぷりの笑みを浮かべて答える。

「ふふつ…

流石は“霸王”と言つべきかしら…」

「 つ

動搖は出さないが

その一言に頭の中で瞬時に警鐘が鳴つた。

（…此奴…暗殺者？…）

だが疑問も残る。

何故、此奴は私の前に姿を晒した？

暗殺するなら仕留める事が最優先事項…
態々相手を警戒させる事は成功率の低下に繋がる。

状況と場合にも因るが…
現状では愚策。

「……何が目的？」

私は静かに問う。

すると、此奴は僅かにだが頭を上げた。

顔の殆んどは隠れているが口元だけが露になる。

何処か、人を小馬鹿にした様な薄い笑み
挑発的な薄ら笑い……

尚且つ上から目線の態度……

私の中で苛立ちが募る。

「そうね……ふふつ……
考えてみたら?
貴女の　霸王の頭で」

「」

グッと右手で柄を握った。

刹那

彼の声と顔が過る。

“華琳、らしくないぞ？”

そう言われた気がした。

瞬間的に見開いていた眼を静かに瞑る。

「 つ、ふうー……

私は大きく息を吐く。

息と共に苛立ちを吐く。

苛立ちと共に不安を吐く。

(……そうだったわね……)

私は“私”に戻る。

霸王の衣は必要だ。
だが、縛られない。

所詮、衣は衣。

“私自身”ではないのだ。

（何をやつてたのかしら）

思い出せば何の事はない。

彼がいつも私に対し示してくれていた。

在るがゆの私で居ても良いのだと。

それが一番大切な事だと。

私は既に知っている。

心は静かになる。

だが、温かい。

まるで

彼が傍らに居る様だ。

私は柄から右手を離す。

右手は腰に当て正面を向き堂々と向き合ひ。

「それで、私に何の話？」

冷静になれば簡単に相手の目的も見えた。

此奴は何かを私に伝えたいから此処に居る。ただそれだけの事。

「曹孟徳、貴女は

再び“胡蝶”を求める?」

「…………何ですって?」

思わず殺氣が滲む。

“冷静になれ!”と心を必死に抑える。

「貴方…“胡蝶”の意味が何か解つて言つてるの?..」

“胡蝶”という表現は私の独自の物だ。

出逢った時から一緒の秋蘭でさえ知らない。

聞けば察しは付くと思うが言つた事は一度も無い。

知っているのは私その他には“胡蝶”自身だけ。

「勿論、知つてゐるわ
“胡蝶”：貴女が“彼”をそう例えていいる事も

そう答えると、クスッ…と笑つて口角を上げた。

殺ス

一瞬だが、本氣だった。

しかし、無意識に放たれた箸の殺氣にも動じる様子が見られなかつた為…

私は冷静さを取り戻す。

「貴方の言つ“再び”…
それは“胡蝶”の代用品?
それとも
「 北郷一刀の再臨よ」

私が言つよりも早く此奴は答えた。

「……信じられないわね」

だが、私は冷静だった。

自分でも驚く程静かに話を聞いていた。

「あら、もつと必死な姿で問い合わせるかと思ったのに意外な反応ね」

向こうにしても同じだったらしい。

私は真っ直ぐに見据える。

「そう?、簡単な事よ

貴方の言葉は矛盾している

“胡蝶”は“夢”：

“物語”が終われば舞台を降りるしかない
だから“胡蝶”は消えた
もし仮に“胡蝶”が戻るとしたらそれは

「

其処で私は口を閉ざす。

「“貴女の胡蝶”ではないかもしない?」

「…… そつよ

私は苦虫を噛み潰した様に言葉を否定した。

彼は言つていた。

私の 曹孟徳の霸業こそ彼が現れた理由だと。

故に霸業の成つた結果…

彼は消えたのだから。

だから、彼が此処へ戻ると言つのであれば…
それには新たな“理由”が存在する筈。

その理由が私ではなく…

私達でも、私達の中の誰かでもないとしたら…

彼は私の元を去る。

例え、この世界に居ても。

そんなの
堪えられる訳がない。

「貴女、つまらない女ね」

呆れた様に吐き捨てる。

「……“つまらない”？
この私を　霸王を前に、貴方は、つまらないと？」

これには流石に頭に来た。
沸々と怒りが込み上がる。

「ええ、つまらないわ
もう少し張り合いが有ると期待していただけに…
殊更にがっかりね」

両腕を上げ、両肩を竦めて溜め息を吐く。

ギリッ…と噛み締めた奥歯が嫌な音を立てる。

「お前に何が解るつー!?」

気付けば怒鳴つていた。

止め様としても…
もつ止まらない。

止める氣も無い。

「つまらない？」

別に誰かを楽しませたくて私は霸王然としてる訳ではないわっ！
私は私の理想の為に霸王の道を選んだつ！
私は私の理想の為に大切な存在を失つたつ！
私の覚悟も、私の想いも、何も知らない癖に…
私の何が解ると言つのつー？
答えてみなさいつー！

感情を爆発させる。

射殺す様な眼差しを向け、怒りに任せて殺氣を放つ。

「…なら、言つてあげる」

私の全てを受け流したかの様に静かに返す。

「貴女はただ“彼”を理由に逃げているだけよ

「つー！」

ドクンッ！、と私の心臓が跳ねた様な感じがした。

「貴女は怖いの…
貴女は恐れているの…」

一步、踏み出されると…
一步、私は後退りする。

「失うかもしれない…
今度こそ全てを失うかも…
希望さえも残さずに…」

また一步、進まれて…
また一步、私は退く。

「もし“彼”が戻つても…
何も覚えていなかつたら…
戻つた“彼”が…
“私の知らない彼”だつたとしたら…」

進まれては、後退りする。

「甘い希望に縋るよりも…
悲しい現実の方が痛みさえ優しく感じるから…」

鬪氣や殺氣は無い。

ただ、言葉に氣圧される。

「もう一度と…
“彼”を失いたくない…
もう一度と…
“痛み”を知りたくない…
だから」

トンッ…と背に何かが触れ振り向むくと、木の幹だと判つた。

そして

追い詰められた。

「だから貴女は気付かない“振り”をしている…

何よりも、誰よりも

“蝴蝶”を翼う“己”に

私の中で何かが音を立てた様な気がした。

まるで硝子が鱗割れた様な小さく、儂い音が

水の入った甕

何事も無ければ水を貯め、溢れる事は無い。

けれど、僅か針の穴程でも穴が空けば水は漏れる。

そして、流れ出す水により穴から罅割れやがて、甕は碎け散る。

「…………あ…………ああ…………」

木の幹に背中を預けながら私は否定する様に頭を振り抵抗する。

「認めなさい…

貴女は何よりも“胡蝶”を求めている

違う

「認めなさい…

貴女は誰よりも“胡蝶”を欲している

違う、違う

「認めなさい…

貴女にとつて“胡蝶”こそ全てなのだと

「違うっ！」

違う違う違う違うっ…………

私は大声で叫んだ。

宛ら、駄々を捏ねる子供の様に嫌々と全身で否定。

だが、本当に拒絶するなら眼も耳も口も塞ぎ…

全力で走つて、その場から離れてしまえば良い。

なのに私は此処に居る。

冷静に自分を分析する私が此処に居る。

私は 解つているのだ。

「ねえ…貴女は忘れたの?

“胡蝶”は“夢”の中…

けれど、 “夢”は何処だと貴女は言つたの?」

そう、私は確かに言つた。

“「この世界が夢か現か幻かなんて…
この世の誰にも判らない”

「確かに“蝴蝶”は貴女の前から消えた…
けれど、それが“終端”と誰が言ったの？」

そうだ

“彼”が消えたのは事実としたとしても…

“物語”が終わったのだと“誰も”証明出来ない。

ならば、“物語”は
“蝴蝶”は

「まだ存在している」

私は答えを自ら口にすらる。

それを聞いて、満足そうに口元に笑みを浮かべる。

そして、笑う。

嬉しそうに、楽しそうに…

まるで玩具を見付けた子供の様に無邪気[。]に。

「 そう言えば、まだ名前を聞いてなかつたわね 」

私は幹から背中を離し前に進み出る。

二人の距離は凡そ二歩。
互いに間合いの内。
だが、警戒は無用。

私は静かに見詰める。

「 我が名は管輶

流星を導く者」

そう言いながら左手により外された頭蓋。

露になつた顔に私は驚く。

独特的の曲線美を描く一いつに纏めた美しい金色の髪[。]

青玉を思わす円らで大きな強い光を宿す碧眼[。]

白磁器の様な艶と滑らかさを持つた白い肌[。]

「そして

姓は曹、名は操、字は孟徳

私の真名は 華琳 」

其処に在ったのは、

まるで鏡を見る様な自分の姿だった。

正直、意味が判らない。
一体何が起きているのか。

茫然とする私を見て彼女は溜め息を吐き、苦笑する。

「はあ…やれやれ、ね
“私”だから仕方無いとは思つけど…
もう少し早く気付きなさいよね?
ただでさえ
素直じやないんだから」

そつ呆れた様に言いながら彼女は肩が凝つたらしく、首筋を揉み解す。

ただ、その顔で言われると妙に説得力が有り…
ちょっとだけ腹が立つ。

「……貴女、何者？」

私がそう訊ねると眼を細め不適な笑みを浮かべる。

「“別の可能性”の貴女」

その一言で閃く物がある。

確か“彼”が似た様な事を言つていた。

“彼”が居た世界での私は男性だったとか…

その世界の歴史と…

この世界の歴史は…

似て非なる物だとも…

それなら、更に別の世界の“私”が居ても不思議ではないだらう。

そして世界は違つていても“私”では有るのだから、ある程度は考え方を解る。

故に互いに“暗黙の了解”で話を始める。

「本当に再臨が？」

「ええ、可能よ
勿論、貴女の知つてゐる…
貴女の愛する“胡蝶”よ」

「そうでなければ何一つも意味が無いわ
私が欲しいの唯一人…
私と 私達と生きてきた“北郷一刀”だけよ

もう迷う事はしない。
もう逃げる事はしない。
もう偽る事はしない。

私は手に入る。

だが、何も一つとして犠牲にもしない。

だつて、私は霸王
望む全てを手に入る。

「ふふっ… そうよ

それでこそ、曹孟徳だわ

まるで我が子を見守る母の様に穏やかに

まるで愛弟子の成長を喜ぶ師の様に朗らかに

まるで“自分自身”を誇る様に悠然と

彼女は微笑む。

「詳しい事は此方に書いて置いたわ」

そつと懐に右手を入れ取り出した一冊の書を私に差し出した。

受け取つて見ると

曹魏の軍色たる濃紺の表装には白い十字文。

如何にも過ぎるが…

“私らしい”とも思う。

「親切な事　え？」

目の前の彼女は全身が光に包まれている。

「あら、時間切れみたいね
まだ話していくけど…

それは叶わぬ願い、か

一つの世界に“私”は一人も要らないものね

彼女は静かに呟く。

それが意味する所は…
私にも何と無く解った。

「三つ、答えてくれる?」

そう訊いた私に対し彼女は黙つて小さく頷いた。

「先ず一つ田…

管轄は貴女だつたの?」

「正確に言えば違つわ

私は“余つた枠”を使って干渉したに過ぎないもの
詳しきは 判るわね?」

彼女は視線を書に落とす。
流石は“私”
良い読みをしてくる。

「ええ、なら一つ田

“貴女”はどうなる?「

「私?、私は消えるわね」

彼女はあっさりと言つ。

“帰る”とは言わない。
つまり“死”を意味する。

「そう…なら最後

何故、貴女は此処までしてくれるので?」

これは

これだけは、絶対に聞いて置く必要が有る。

「私が、曹孟徳だからよ」

彼女は迷わず言い切る。

「私は他人に左右されてる人生なんて御免だわ
私は私らしく、私の人生を私の意志で歩む
だから」

其処で彼女は微笑む。

「私が掴み損ねた幸せと、悔やみ続けた人生を…
貴女には繰り返させない」

私は理解する。

彼女は“私”の“未来”的“可能性”的姿だと。
「それに、泣かされたまま引き下がるなんて
霸王として赦せないもの」

そう言って彼女は笑う。

あの時の“彼”とは違つて何処までも晴れやかに。

全てを遣り遂げた と。

ならば

「なら、貴女の分まで私は幸せになつてあげる
貴女が羨む程に
貴女が誇れる様に
貴女が出来なかつた全てを私は手に入れる

それが、私 豊孟徳よ

私は応える。

私の歩む生を賭して。

「ふふつ…

私達は二つでなくてはね

例え違う存在だとしても…
例え刹那だったとしても…

私達の志は 交わつた。

「それじゃあね」

彼女の姿が空氣に融ける。

私は永遠の眠りを告げる。

「ええ、 おやすみなさい」

その会話を最後に

彼女は淡い光の粒となつて消えて逝つた。

ありがとう

華琳

寂しがり屋の

それは“あの日”の別れの“彼”の最後の言葉。

知る者は“私”と“彼”的一人だけ

「趣味が悪いわよ…ばか」

最後まで“らしい”彼女に言葉を贈り

私は蒼天を見上げた。

「貴男は私を泣かせた。
その責任は取つて貰うわよ
色々と、覚悟していなさい
だから

また会いましょう、一刀！

今度は絶対に離さないわ
「

陳留の南

炎緋に金色の“孫”の旗を靡かせ、北へ向けて街道を行軍する一団が有つた。

「ふ～ん、ふ～ん」

鼻歌を歌いながら上機嫌で馬上に在るのは腰程の長さの綺麗な桃色の髪の女性。

戦場では鋭く輝く切れ長の碧眼は子供の様に緩む。

名は孫策、字は伯符。

真名は雪蓮

孫吳の王、江東の小霸王。

「……上機嫌だな」

その様子を右斜め後ろから馬に乗つて見詰める黒髪の女性は小さく溜め息を吐き僅かにズレた眼鏡を直す。

硝子の奥で緑色の瞳が頭に浮かぶ苦労に嘆いていた。

名は周瑜、字は公謹。

真名は冥琳

孫吳の大都督、吳の良心。

眉間に皺は氣苦労の証。

また“美周郎”と称される美貌の持ち主でもある。

「仕方無いですよ」

三国初の大規模な催しですからね～」

左隣に馬を並べている薄緑の髪の女性が暢気な笑顔を浮かべながら
答える。

名は陸遜、字は伯言。

真名は穩

孫吳の次代を担う支柱。

冥琳の弟子でもある。

“たわわ軍師”なる異名も持つてたりする。

「そうそう、堅苦しい事は抜きにしないとね
シャオも凄い楽しみ～」

二人の前 雪蓮の左隣を馬ではなく“白虎”の背に乗り、“大熊猫”を従えて進む桃色の髪を頭の両側で輪を作る様に纏めた少女が笑顔で振り向く。

まだ幼いが雪蓮に似ている顔立ちは当然。

名は孫尚香、真名は小蓮。

お転婆な孫家の末姫。

最近は宮中での悪戯が酷くなつてきているとか。

「何を言つているの！

三国初の公の催しであればこそ礼節が大事だ！

小蓮、大体お前はだな…」

雪蓮を挟んだ向かい側

雪蓮の右隣に並んだ短めの桃色の髪の女性が奢めつつ説教を始めた。

彼女も雪蓮に

そして小蓮に似ている。

名は孫權、字は仲謀。

真名は蓮華

孫家の次女で、次期吳王。

尤も、本人はまだ知らないのだが。

また“大陸一の美尻”等と一部で称えられている。

「し、思春殿！
どど、どつしまじょ、づーー？」

その様子を見て

蓮華の後方、馬の頭に隠れそうな小柄な身体に赤みの有る黒髪の少女は右隣へと慌てて顔を向ける。

名は周泰、字は幼平。

真名は明命

孫吳隨一の隠密。

孫權の忠臣としても周囲の評価は高い。本人の自覚は別として。

「…落ち着け、明命
いつもの事だ」

明命の右隣に居た紫の髪の女性は小さく溜め息を吐きながら答える。

名は甘寧、字は興霸。

真名は思春

孫吳の水軍指揮官。

元江賊 錦帆賊の頭。

“蓮華命”の忠臣。

「いつもの事、ですか？」

確かに思春さんの言う通りかもしませんね」

達観した様な思春の言葉に栗色の髪を襟足でお団子にした片眼鏡の少女が明命の左隣で感心している。

名は呂蒙、字は子明。

真名は亞莎

孫吳の次代を担う一人。

かつて“阿蒙”と呼ばれていた頃は雪蓮以上の戦狂いだったとか。人は見掛けに因らない。

「はつはつはつはつはつ
何とも賑やかな事じやな
やはり、ひうでなくては」

雪蓮の後方

忠臣の列の中央では薄紫の髪を揺らしながら楽し気に笑っている女性。

名は董蓋、字は公覆。

真名は祭

孫興一の宿将。

先代・孫堅の時代から仕え赤壁の戦いに置いては己を犠牲に策を仕掛けた。

「やれやれ…

生きて帰られたかと思えば性分は相変わらずですね」

左隣の眞琳は溜め息を吐き皮肉を言つ。

だが、口元は綻んでいる。

「祭が帰ってきた時、他の誰より真っ先に抱き着いて泣いて喜んだのは誰だつたかしらね～？」

雪蓮は振り向いてニヤニヤ笑いながら眞琳を見る。

「…はて？

その様な者が居たか？
覚えているか亞莎？」

「えええーつー！？

わ、私ですかー！？」

冥琳からの無茶振りに驚き困惑の亞莎。

「姉様だけならいざ知らず冥琳まで…
亞莎を苛めてやるな」

蓮華が助け船を出す。

「私だけならつてどうこう事なのよ、蓮華？」

「判らないなら、御自分の胸に聞いて下さい」

「じゃ、冥琳聞いてー」

断る「

妹と親友に邪険にされると「ぶーー」と口を尖らせて拗ねる雪蓮。

孫吳の中核たる9名。

その護衛の精銳が20名。

御一行は“天遣想祈祭”的に魏を訪れていた。

「でも、祭が帰ってきたは吃驚したよね」

小蓮が思い出した様に祭を見て言った。

赤壁の戦いで黄蓋は敵陣に乗り込み、火計を謀つた。

美周郎と伏竜鳳雛は練つた“連環の計”を行つた。

だが、魏は両の策を破り、夏侯淵　秋蘭の射た矢により黄蓋は倒れた。

黄蓋は死んだ

敵味方問わず戦場の誰もがそう思つていただろう。

しかし、唯一人だけ例外が存在していた。

“天の御遣い”

“北郷一刀”である。

呉との戦に向けて立つ前、彼は華琳の命で華陀という旅の医師の元を訪れ診察を受けていた。

その時、彼は華陀に一つの頼み事をした。

それは

“赤壁の戦いの中
黄蓋と部下達が河を
流れてくる
だから、助けて欲しい”

という物だつた。

俄には信じられない言葉。

だが、彼の眼を見た華陀は言葉を信じた。

華陀が長江

赤壁の下流で待つていると本当に黄蓋が流れてきた。

流石は夏侯妙才といつべきだろ？

矢は黄蓋の心臓に真っ直ぐ刺さつていた。

しかし、その腕前のお陰で無駄な傷が無かつた。

出血は酷かつたが予め準備していた為、何も問題無く治療は成功した。

黄蓋と部下達は華陀により北郷一刀の用意した場所で軟禁状態になる。

但し、これは治療を優先し療養させる為。

ただ、戦時中という理由も有つて連絡は不可だつた。

その後、黄蓋が意識を取り戻したのは一ヶ月後。

既に戦争は終結

三國同盟の誕生も彼女等の耳に届いていた。

その後、黄蓋の体調が戻り建業へ帰り着いたのが…
今から二ヶ月前。

その一ヶ月後の三国会議に彼女が出席すると
魏と蜀の者達は軽い混乱を起こした。

そして、事の真相を聞いて更に驚いていた。

華陀曰く

“北郷”の言葉がなければ間違いなく死んでいた。

また北郷曰く

“未来を守る為に彼女達を失う訳にはいかないんだ”
と、華陀に向け言つたらしい。

彼の名は世に轟く。

まるで全てを見通したかの様な奇跡の御業。

赤壁での策を見破った上、忠臣たる敵将を助け…

霸王と共に歩み、大陸へと平和を齎した…

“天の御遣い”

元々、魏では霸王と同格の存在感だつたらしげ…

呉蜀に於いては一気に名が高まつたのは間違ひ無い。

戦後から“天の御遣い”を神格化し始めた魏。

戦時中ではなく、戦後。

つまり“平和の象徴”にと考へての事だらう。

彼が天へと“帰つた”事も一因かもしれないが…
それは定かではない。

だが、それは呉蜀にとつて良い事ではなかつた。

魏に主導権を握られる事を懸念すれば当然の事。

ただそれも今は過去の話。

宿将・黃蓋とその部下達を救つた事で呉の中枢：呉の民には“恩人”として称えられる事になった。

「しかし、北郷という男は掴み所がなかつたな…」

冥琳が静かに呟く。

最初の三国会議にて魏から提案された街の警備方法。

眼を通してみれば…

“見事”としか言つ言葉が見付からなかつた。

単純な警備体制の強化案と思つていたが…違つた。

治安の維持・向上を礎に、各地・各所に合わせた形を築く事の必要性と方法…

更には、それに伴う経費や人材の確保：人材の育成の仕方…

予期される問題点の予防と改善方法…

また経済効果に至るまで…

案は事細かに、先の先まで考えられていた。

「私は連合の時に少しだけ見ただけだけど…
祭はどうなの？」

雪蓮は祭に訊いた。

「街の警備隊の隊長で…

華琳殿の個人的な客将だと言つてはいたが…
正直、よく解らぬな
あの時は、只の孺子にしか見えなんだしね」

祭は思い出しながら苦笑。

そんな相手に、自分は命を救われたのだから。

「…秋蘭が言つていたな

決戦の前、警備隊の者達を使うか迷つていた時…
北郷は“戦後”を見て案を否定した、と」

「それはつまり

魏は常に余力を残して戦に臨んでいたと？」

冥琳の言葉に蓮華の視線と声色が厳しくなる。

「それは違うわよ、蓮華

北郷は華琳の勝利を信じて“未来”を見ていた…
“勝たなくては…”なんて考えは一切無く、ね

雪蓮は静かに、諭す様に、蒼天を見上げて言つ。

その様子を見て冥琳は同じ考えに至つた事を知る。

我々や劉備達と違い

唯一人

“戦後”を見て動いた。

勿論、戦に勝たなければ、その後の事を幾ら気にしてた所で何の意味も無い。

だから、我々は

ただ“勝つ事だけ”を考え戦つていた。

けれど、北郷だけは
戦場ではなく

“未来”を見ていた。

華琳の　曹孟徳の勝利を信じていたが故だらうが…

果たして、自分に彼の様な真似が出来るか…

己が主

私の場合は雪蓮になるが…

戦の全てを任せ
先の事に備えられるか?

(……到底、無理だな)

我々は勝利に固執し過ぎ、本懐を見失っていたが故に敗北したのか
もしれない。

(あの決戦に於いて…
最後まで自らの信念を貫き通したのは…
魏のみ、という事か…)

そつ思つと今の三國同盟も彼の“仕込み”に思えた。

(……こや、恐らく魏の者は彼との歩みの中で少しづつ変わったのだ
るや…)

何の証拠も無い考え方だが…

冥琳には何故か…

正解の様な気がした。

〔冥琳が陳留に向け先触れを指示して送り出すと隊列はバラバラになつた。〕

早くも御祭り気分になつてきたのだろう。

好き勝手に会話しながらも行軍に支障は出で無い。

（やれやれ…

まあ、余計な問題さえ誰も起こさなければ構わんか）

そつ考えながら

冥琳は要注意人物

主に雪蓮の手綱をキツく、絞つておこなつと思つ。

「華琳達、大丈夫かしら」

噂をすれば

いつの間にか隣に来て居た雪蓮がぽつりと呟いた。

陳留では華琳の噂をすれば華琳が現れると聞くが…

まさか、呉も例外ではないのかとか考えてしまった。

「……気付いていたのか」

冥琳は思考を戻しながら、意外そうに返す。

「そりゃあ、あれだけ戦や何やらで顔を会わせてれば嫌でも違和感に気付くわ」

雪蓮は苦笑する。

かつては、霸を競い合つた敵同士…

今はあの乱世を生き抜いた戦友であり、盟友。

縁とは不思議な物だ。

「華琳達にとつて…

“北郷一刀”という存在は“天の御遣い”の名以上に大きかつたのだろうな

冥琳は静かに思いを巡らし彼女達を想う。

考え方だけなら

逝つた者の志を継ぎ進めと叱咤激励出来る。

だが、現実は難しい。

普通なら泣き叫び

沈み鬱き込んでしまつても変ではない。

愛する者が“存在”を賭し築いた“平和”

それを守り、繋ぐ事に心が気付くには時間が要る。

しかし、彼女達は立つた。

一人も欠ける事無く。

志を一つに歩みを止めず、“未来”へと向かつ。

ただ

「見てる此方が痛々しくて仕方無いのよね…」

雪蓮は苦笑して見せる。

しかし、彼女が心を痛めている事は冥琳には手に取る様に判つた。

冥琳もまた、同じ気持ちで心を痛めていたから。

「…何か見付かりそう?」

「…せつしつとは言えんな
事が事だけに難しい」

「そり…」

会話は直ぐに終わる。

呉は密かに“天”に関する情報を集めている。

それは魏の為、朋友の為…

そして何より

自分達の恩人の為に。

「取り敢えず、向こうでは“呉々も”騒がない様に」

「はーいっ」

冥琳の言葉の真意を汲み、雪蓮は笑顔で答える。

(少しの間だが…
氣を紛らわす位は出来る
束の間の“夢”を楽しめ)

冥琳は親友の自由奔放さに少しだけ期待し微笑んだ。

第三話 胡蝶への道

曹操の城

“天遣想祈祭”は一田田を迎えていた。

初日となる昨夜は吳蜀から訪れた旨と無礼講の宴。

一日酔いに苦しむ者も居るだらつから…との配慮から特別な催しは無い。

とはいって、街の賑やかさに誘われ、客人達は城外へ。

よつて、昨夜の後片付けをする侍女や兵士を除けば、実に静かな物だった。

そんな城の通路を春蘭達が歩いていた。

「じつかし、華琳は何やってウチらを集めよんの?」

「私に聞けよつ…?」

霞は頭の後ろで手を組んだ格好で、隣を歩く春蘭ではなく首を捻り、態々後ろの秋蘭を見て訊ねたので…

透かさず春蘭がツツ「ハリを入れた。

「なら、何でやの？」

「私が知る訳ないだろ？！」

霞の問いに、春蘭は堂々と胸を張つて答へる。

「…………なあ、秋蘭

いつぺん、マジで殺してもええか？」

「殺しても直らんぞ？」

苛立つた霞の言葉に秋蘭は“無駄な事だ”と言つ様に言葉を返す。

「取り敢えず、ウチの氣が収まる位やなあ……」

そつ茲き、横田で前へ出た春蘭を見る霞。

秋蘭の言葉で、既に怒氣も削がれていた。

「で、どうなん？」

「私も詳しい事は聞いてはいないのでな……ただ

」

秋蘭は“前”を見る。

「……一刀絡み、か

霞が続きを呟く。

華琳からの招集自体は殊更珍しくも何ともない。

が、場所が違う。

いつもなら玉座の間。
或いは中庭か東屋。
急ぎでも華琳の執務室。

なのに今回は一刀の部屋。

一刀が居た時を含め

今まで、一度も“全員”で集まつた事が無い。

「…そりやあ、昨夜から様子が変やつたなあ

」

霞の言葉に秋蘭も頷く。

昨夜の彼女は妙だった。

今までの“翳り”が消え、何処か“そわそわ”としている様に見えた。

「……新しい恋でも
いや、それはないやうな」

“したか？”と言い掛けて霞は自分で否定する。

その程度で乗り越えられるのなら、誰も心を痛めなどしない。

「あーー！、春蘭様、霞様、秋蘭様なのーー！」

元気な声に目を向ければ、息を切らせながら、中庭を抜けてくる人影が三つ。

「何だ？、随分と急いで
何か有ったのか？」

その様子を見て、不思議に思い訊ねる春蘭。

「いえ、真桜が寝ぼ」

「わあーつー?」

「何でもないーつ!」

「何でもないんですーつー!」

凪の口を真桜は塞ぎ必死に叫んで誤魔化した。

凪達を加え、一刀の部屋へ向かうと

「おやー?」

「魏の武将がお揃いで…

何か有りましたか?」

部屋の前で風と稟に会つ。

が、様子がおかしい。

「何や?、風も稟も華琳の招集聞いてへんの?」

霞がそう言つと一人は顔を見合わせ、首を横に振る。

「私達は城に戻る様ことの伝言を受けただけですね」

そう稟が答える。

「…変だな」

「変やな」

「変ですね」

「変やね」

「変なのー」

「変態ね」

「うむ、変態だ」

と春蘭が言つた時点で全員が沈黙する。

「なんや、桂花か…」

「期待外れな物を見る様な眼で見ないでくれる?」

「よお判つ むぐつ！？」

霞の言葉に睨み返す桂花の発言につい乗っかり掛けた真桜の口を匪と沙和が手で塞いだ。

「桂花も知らないのか？」

「招集の事なら聞いてるわ

といふか風と稟が知らないのは、言ひ前に一人が街に出てたからよだから城に戻る様に伝言を頼んだの」

秋蘭の質問に桂花は経緯を踏まえて答える。

「あつ！、春蘭様ーつ」

「ちょつ 季衣つ！？」

「気を付けてよーつ！？」

一同が声の方に振り向くと茶器を持った季衣と御菓子の入った皿を持った流琉が此方へ来ていた。

それを見て一同は更に謎を深めた。

「…流琉、それは誰が？」

「これですか？」

華琳様ですけど…何か？」

秋蘭の質問に答えた流琉は小首を傾げる。

流琉も詳しくは知らないとその反応で読み取れた。

桂花と稟も“一体何？”と答えを見付け兼ねている。

「あら、思つてたより早く皆集まつたのね」

『華琳様つ！』

噂をすれば ではなく、“本人”の登場に皆が声を揃えた。

「流琉、季衣

中へ運んで用意して頂戴

凪達は足りない分の椅子を探して来て頂戴

『はいっ！』

華琳の指示に五人は直ぐに行動を始める。

「あの、華琳様…

これは一体？」

恐る恐る訊ねる裏。

「詳しい事は準備が出来てから話すわ」

そう言つと華琳は流琉へと近寄り指示を出す。

春蘭・桂花は“手伝い”を志願するが玉碎した。

「御茶会つむぎつ感じとまどつかひやつなあ…

「そうですね…

『気にはなりますが…』

「まあ、直ぐに判るか…」

靈・稟・秋蘭は部屋の外で佇みながら呟いた。

今、一刀の部屋は御茶会の会場になつていた。

台と机に湯呑みが並び…

十二人の乙女達が集つ。

だが、雰囲気は和やかとは御世辞にも言えない。

「…さて、集まつて貰つた理由を話す前に…
一つだけ、確認するわ」

華琳が真剣な表情で言つと思わず全員が息を飲み…
姿勢を正した。

華琳は全員を見てから口を開いた。

「皆、一刀に会いたい？」

『 つ！…！？？？』

その一言に、全員の表情に驚きが浮かぶ。

それは当然だつた。

他の者達

春蘭と桂花以外は一度位は誰かの前で“それ”を口にした経験がある。

春蘭と桂花でさえ一人なら思わず呟き、洩らした事が少なからず有つた。

だが、華琳だけは違つた。

決して“それ”を口にする事は無かつた。

言えば楽になるだらうが…

彼女の性格　主に誇りがそれを許さなかつた。

そんな華琳が自ら口にしたとなれば誰でも驚く。

同時に

今まで不確かだつた“光”が眩く輝くのを感じる。

身も心も熱く染まる。

「どうなのかしら?」

そつ眞に訊ねる華琳。

本当に　随分と久し振りに見る“らしい”微笑みを浮かべている。

「華琳様、此処には一刀に会いたくない者など一人も居はしません

つー

答えたのは春蘭。

彼女もまた、久し方振りに高揚した笑みを見せた。

「我等は“北郷隊”です」

「隊長有つてのウチらや」

「隊長に会いたいのつー」

凪・真桜・沙和が続き

「ボクも会いたいっ！
兄ちゃんに会いたいっ！」

「私も会いたいですっ！
兄様に会いたいですっ！」

季衣と流琉が叫び

「愚問ですね」

「当然なのですよー」

「…ふんつ、顔位は見せてから死んで欲しいわね」

「ふふつ…全くだ」

稟・風・桂花・秋蘭は顔に余裕を浮かべて答えた

「一刀に会えるんやつたら何でもしたるつ！
邪魔すんなら神でも天でも打ちのめしたるでえつ！」

最後に霞が鼻息も荒く拳を華琳の前に突き出した。

「当然だつ！
我等は華琳様の剣つ！
我等は霸王の剣つ！
我が曹魏に敵は無いつ！」

春蘭が士氣を高め霞の拳に掌を乗せると旨が続く。

重なり合つ十一の掌。

「ふふつ、良い覚悟ね
その言葉、その意志…

決して、忘れないで頂戴」

最後に華琳が掌を重ね
楽しそうに笑つた。

一同は席に座り直す。

視線は華琳に集まる。

「先ずは結論から言つわ

此処までして“無理”とは言わない事は判つてゐる。

だが、それでも緊張は有りゴクッ…と息を飲む。

「一刀は帰つて来られる」

『つ…』

華琳の言葉に、歡喜の花が一斉に咲いた。

だが、冷静な者も居た。

「…………華琳様

“帰つて来られる”とは、どういう事ですか？」

そう訊いたのは稟。

その言葉に秋蘭・桂花・風が気付く。

“帰つてくる”ではなく、“帰つて来られる”

それが意味する所は…

「一刀は“自分の意志”で“帰つてくる”事が不可能だという事よ

理解出来てない者達は顔を顰め、首を傾げる。

既に同じ答えに至っていた四人は冷静だった。

華琳の不動の姿を見れば、“先”が有るのだと判る。

「順に説明すると…

先ず、一刀は“この世界”からは“消えた”けど…
一刀の世界

私達の言う“天の世界”に帰つてはいないわ

「ちょっと待つてや華琳
ほんなら一刀は何処に？」

華琳の説明に霞が訊く。

“黙つて聞いてなさい”と言わんばかりに頭脳派四人の視線が霞に
刺さる。

華琳は気にせず答えた。

「一刀は“世界の狭間”を彷徨つてる状態よ」

華琳はお茶を一口啜ると、右隣に座る春蘭の湯呑みと隣り合わせに
置く。

そして、右手の人差し指で湯呑みを指し

「此方が私達の世界…
其方が天の世界…
一刀が居るのは…此処」

そう言って二つの湯呑みの間に人差し指を立てる。

「ただ“狭間”と言つても何か在る訳じやない…

其處は虚無の世界…

長く居続ける事は…

存在の“消滅”に繋がる」

華琳の言葉に全員が緊張と違つた意味で息を飲んだ。

「だからと言つて簡単には事は進まないわ
一刀の“消滅”までの時間は一刀の意志次第…
でも、一刀なら大丈夫
そうでしょ？」

華琳は皆を見回し微笑む。

そう 皆、判つてゐる。
彼女達は知つてゐる。

“北郷一刀”は

“どんな時でも諦めない”

そういう男だと

ただ、それだけの事。
だが、それだけで十分。

余計な不安は消え去る。

「だから、その間に私達は一刀を呼び戻す為の準備を整える勿論、出来る限り迅速に」

その言葉と全員が頷いた。

「さて、その準備に關して説明するわね

そもそも、一刀はその存在自体がこの世界で“異質”なのは皆も知つての通り

ならば…“何故”、一刀は“異質”で有りながら存在出来たのか…誰か答えられる?」

華琳が見回す…

風が静かに手を上げた。

華琳は視線で発言を促す。

「仮の話ですが…」

“存在”する為の“器”が在つたから、ですかー?」

風の言葉に華琳は微笑む。

「その通りよ

一刀が“存在出来た”のは“枠”が在ったから…
そして

その“枠”こそが一刀を、彼がこの世界へ来る事を、全ての者に“
認識”させた始まりの存在…」

「……管轄……」

秋蘭が目を見開きながら、その名を呟いた。

「そう…

“管轄”が“天の御遣い”の降臨を予言し…

一刀はこの世界に現れた

そして、誰もが“管轄”的名を知っているのに…

誰も顔を知らない…

不思議だとは思わない？」

言われてみて初めて気付く“違和感”に戸惑う。

それを見て、華琳は静かに瞼を閉じる。

誰も知らないのか?
何故…

何故…

誰も気にしないのか？

何故…
私は気付かなかつたのか…

頭の中で“終わり”なく、疑問が渦巻く。

華琳はゆつくりと瞼を開け答えを示す。

“天の御遣い”の降臨
“管轄”とは
“星の導き手”の事…

“外史”への参入を補助し認知させる為だけの存在
つまりは“道標”なの

だから、あの占いの事なら殆んどの者が知つてゐる
なのに、その正体は不明…
それは当然ね

“管轄”に必要なのは名と存在の“枠”だけ…
そして、“天の御遣い”が降臨すれば役目を終える
“枠”を残し、消え去る
故に、誰も“管轄”に対し疑問を持たない

そして、その空いた“枠”を使って“天の御遣い”が存在する事が出来る…

これが

“管轄”という存在の持つ“仕組み”よ

華琳のした説明を理解する事が出来たのは半数…

正直に言つて疑問符ばかり増えている状況だった。

「これは理解出来なくとも構わないわ

今後にも特に支障は無いし聞き流しなさい」

“解る者だけ質問なさい”と暗に言わんばかりの発言だが半数の者は安堵した。

「あのー、華琳様ー

先程言われた“外史”とは何ですかー？」

風が訊ねる。

「“外史”とは言つなれば“可能性の世界”よ

そつ言いながら華琳は眞を見て次の言葉を継ぐ。

「例えるならば書物ね

此処に居る者で… そうね

“劉邦”を主役とした話を書くとしましよう

物語の體子となる史実

これが“正史”と呼ばれる“過去”的“流れ”よ

物語は“書き手”によつて表現や解釈が異なるし…
場合によつては盛り上げる為に登場人物等を“創作”する事もある
でしょう

物語は“正史”から派生し“書き手”の数だけ新しい“世界”となる

この“世界”が“外史”…
似て非なる“異世界”よ

理解出来た者は驚きに目を見開いている。

だが、それでも頭を捻つてゐる者達も居る訳で…

「更に噛み砕いて言えば…
“いつ有れば”とか…
“こんな風なら”とか…

“想像”した事が形取つた存在が“外史”なのよ

仕方無く華琳が付け足すと“成る程つ！”と理解した声が上がつた。

「成る程…

そう考えれば、一刀の言う“天の歴史”と…

我々の在る世界の“現実”とが、何処か“似てゐる”のも頷けるな

…

「…でも、それだと私達は“物語”の登場人物だつて事にならない
？」

秋蘭の言葉に桂花が疑問を突き付ける。

「それは“主觀”的違いで説明出来ますね」

「ですねー

この世界を基準にすれば、お兄さんの居た天の世界が“外史”にな
りー

天の世界を基準にすれば、この世界が“外史”という事になります
ねー」

稟と風が桂花の疑問に答え四人は華琳を見る。

“外史”的位置付け論は各自適当に解釈なさい

大切なのは

私達は“此処”に在り…

一刀が“此処”に居ない、その“現実”よ

その一言に場の空気が張り詰めた。

華琳は戻った緊張感に対し満足そうに微笑む。

「一刀は今、何方付かずの『ぶらりんな』状態よ」

「あの変態らしきわね」

「流石、魏の種馬やね～」

「隊長らしいの～」

桂花・真桜・沙和が華琳の言葉にシッコんだ。

やつぱり危機的状況下でも“優柔不断”は直らないのだらうと皆が納得。

「理由は簡単よ

一刀は本来は“向こう”の存在だから在るべき世界へ戻らうとしている

けれど、一刀自身の意志は“此方”へと“帰る”事を望んでいる

判つていても…

改めて言われると切なさが胸を締め付けた。

ふと、其処で疑問が浮かぶ者が居た。

「あの、華琳様…

一刀殿は“何故”消えたのでしょうか？」

稟が静かに訊ねる。

「…正直、難しい質問ね」

華琳は小さく息を吐く。

湯呑みを持ち、茶を飲んで口と喉を潤す。

「…恐らく“起点”は私
“曹孟徳に天下を取る”
それが一刀の

“天の御遣い”の役目

だから、その意味で言えば“役目を終えた”存在故に“舞台”から

“消えた”

華琳の言葉に全員が黙る。

なら、天下を取らなければ一刀は消えずには済んだか？

そう訊かれて“そうだ”と誰が答える？

誰が保証出来る？

仮に出来たとして

その為に“諦める”事を、“北郷一刀”は良しとするだらうか？

答えは 否。

私達が惹かれ、変えられ、愛した彼ならば

“諦めるなっ！”と叫び、叱咤する。

それは可能性ではない。

確信を持つて断言出来る。

「では、私や流琉を助け、苦しでいたのも…」

そつ眩き俯く秋蘭の言葉に流琉の顔が悲しみに歪む。

流琉の隣に座る季衣までも泣きたくなつていい。

「それは違うでしょうね」

だが、華琳は即座にそれを否定する。

三人は顔を上げた。

「もしも仮に“死ぬ筈”的者が“生存”する事により一刀の存在が揺らぐのなら彼が“残っている”時点で矛盾してくるわそれに私に 私達に天下を与える事で存在が消えるというのもおかしいのよ

“管轄”的“枠”は今でも在り“空席”的まま…

降臨した“天の御遣い”が役目を終えて消えたのなら“枠”も用済みな筈…

なのに“枠”は今も在る

「…一刀殿が消えた事には何か“別の理由”が？」

稟の瞳が華琳を見詰めると華琳は真っ直ぐに見返す。

「もし、一刀が消える事で私達が“試されている”としたら？」

『つー』

全員が目を見開く。

“天の御遣い”が天下に平和と安寧を齎すのなら、それを維持し、繁栄させるのは“私達”的役目。つまり、彼奴が消えたのは“何者か”による“試練”という訳ですか？」

桂花が軍師の表情で訊くと稟も風も目付きが変わる。

“主”に“敵”が居るなら戦う術を練るのが彼女達の役目。

“何者か”ではないわ
私達を試しているのは
“この世界そのもの”よ

そう言って、華琳は不適に微笑んだ。

華琳の予想外の発言。

だが、心が揺れる者は一人として居ない。

「…ふふつ…

世界、世界ですか…
なあ、霞、面白そつだとは思わないか？」

春蘭は楽しそうに笑う。

「ああ、オモロイなあ…

こんなにワクワクすんのは赤壁以来やなあ…」

霞もまた恍惚とした笑みを浮かべている。

「つたぐ、この脳筋達は…
少しば考えなさいよね」

そう呟く桂花だが、口元は狡猾な笑みに歪む。

見回せば

皆が皆、各自に“らしい”笑みを浮かべている。

「じゃあ、士氣も高まつた所で本題に入るわよ?」

『はつ一』

懐かしい

“霸王軍”の軍議の空気が場を支配する。

「一刀が帰つて来れるかは最後は本人の意志次第よ
だけど、それを可能にするのは私達の行動如何…
それを心して置きなさい」

華琳の言葉に全員が力強く頷いて応える。

「私達が成すべき事…
それは“各々の試練”へと挑み、成し遂げる事よ」

そう言って、華琳は懐から一冊の書を取り出し、台の上に置いた。

曹魏の軍色の濃紺の表紙に白の十字文。

「華琳様…これは？」

春蘭が書を見て訊ねる。

「“外史”の“私達”から託された“意志”よ

『 つ！ つ？』

そつ言つて、華琳は右手を伸ばし表紙を捲る。

其処には

先程、華琳から説明された事が書かれていた。

見覚えの有る

“曹孟徳”の筆跡で。

「彼女達は“未来”…

一刀を失つたまま後悔して生きる“私達の可能性”
けれど、彼女達は諦めず、戦い抜き、私達に“志”を託して逝つた
わ

華琳は“彼女”の姿を思い出しながら話す。

「叶うのならば、彼女達も自分の手で成し遂げ一刀と共に歩み生き
たかった…
けれど、叶わなかつた
だから、彼女達は託した
“未来”を変える為に
“可能性”を持つ私達へ」

静かな、けれど揺るぎ無い華琳の言葉。

「此處には私達自身からの言葉で、各々の“試練”的事が記されているわ

今から順に読みなさい」

そつとまず、春蘭へと書を手渡した。

春蘭を始め、秋蘭、桂花、霞、季衣、流琉、稟、風、凪、真桜、沙和と読む。

そして、書は華琳の手元へ戻つて來た。

「皆、自分の挑む“試練”は判つたわね?」

だが、華琳の言葉に答えず互いに見合い複雑な表情を浮かべていた。

半数は“何とかなるか”と覺悟を決めた様な表情。

しかし、残る者達は表情を青くしている。

「…まあ、内容には一通り私も田を通したから…
貴女達の反応も頷けるわ」

華琳は“やれやれ…”と、小さく溜め息を吐く。

「……なあ 華琳

ウチ、ホンマに“「レ」”をせなアカンの?
交換とか駄目なん?」

珍しく霞の弱気な発言。

「見苦しいわよ、霞」

だが、叱咤したのは桂花。

「んな事言つたかて…
アンタのも結構

「全部、彼奴の所為よ」

「へ?」

霞は自分と同様に青ざめていた桂花からの言葉に対し反論　もとい同意を得る様な事を言おうとしたが、桂花の言葉に遮られた。

そして、意外な言葉に霞は呆然とするが桂花の言葉は止まらない。

「全部彼奴が悪いのよつ！」

私の苦しみも、悔しさも、痛みも、辛さも、悲しみも　寂しさもつ！

全部、全部、全一一部つ！

彼奴の所為よつ！……！

だから

“帰つて来たら”キッチリ責任取らせてやるわつ！

興奮気味に叫ぶが

その瞳には静かに燃え盛る“炎”が輝き、宿る。

“ そう思えば

“ 何でも出来るでしょ？”

そう桂花の目が言つてゐる様に霞は感じた。

「 ははつ、 そやな
全部一刀が悪いねんな」

霞は笑う。

皆も笑う。

そうだ、どんな事でも今の自分達を退かせられない。

取り戻すと 否。

必ず手に入れると決めた。

愛する人と共に在る未来を

だから、折れはしない。

その様子に華琳は微笑む。

「但し、一度に全員揃つて“試練”に挑む様な訳にはいかないわ
先ずは“天遺想祈祭”中に各國への協力の要請を
同時に各部署の調整と配置・振り分けの見直し
また各々の任の引き継ぎも忘れずに行う事

行動は迅速、かつ正確に

“天遺想祈祭”終了と共に私達は各自“試練”の地へ向かう事とする
以上、直ちに行動に移れ」

『御意つー』

華琳の一聲に全員が部屋を後にして城内へと散る。

華琳は部屋の入り口に立ち両手を扉に掛けて佇む。

静かに部屋の中を見詰め、微笑みを浮かべる。

「…次に私達が此処に来るのは“貴男”が帰った時
その時は ふふつ…
覚悟しなさいね？」

“彼”的戸惑い、叫ぶ姿を想像しながら

華琳は静かに扉を閉める。

次に開く

その時に、想いを馳せて。

第四話 真桜の試練

魏国

“彼方”的“正史”ならばこの時代は、まだ“許県”であり

また“帝”が居る都とされ魏の中枢となる地。

だが、“此方”的“正史”に於いては“帝”も居らず魏の首都でもない。

なのに“許昌”とは
“奇妙”な物だ。

ただ“此方”的“現実”と“比較”する物が無ければ“事実”は一つだけ。

誰も“違和感”など感じもしないのだ。

そう

私達が知る“現実”など、“世界”的“欠片”にしか過ぎないのだ。

それでも、今在る“現実”を見詰める事が

「 つてえ！

どんだけ、無駄に前振りが長いんやつー！」

思わず、ツツ「//」を入れてしまった。

“既視感”だと感じるのは決して、“気のせい”ではなかつたりする。

「確かに…“でじやぶ”とか“隊長”が言つてたなあ」

いつだつたか、“隊長”が呟いていたのを聞き訊ねてみた事が有つた。

まあ、それはそれ。

手元の竹簡に墨を落とすと先程の言葉が文として書かれている。

「あん時は、お陰で皆から白い墨で見られたなあ…」

“隊長”の部屋に集まつたあの日の“試練”に関する記述を読んだ時

“自分”の書いた筈の文にツツ「//」を入れた。

「まあ、ウチらしごっかやウチらしこんやけどねえ」

ツツコまれた瞬間

“流石はウチやねつ！”と感心したが…

周囲の反応は冷ややかで、“可哀想”な物を見る目をしていた。

「しゃあないねん…

それが“ウチ”やねんし」

そう呟き、イジケてみる。

だが、有る筈の“反応”が無い事に寂しさを覚えた。

「…………」

やつぱ、風達が居らんと…調子出えへんなあ…

一人愚痴りながら許昌へと馬を走らせる。

現在地は陳留の南の街道。

まだ、陳留では“祭り”の真っ最中。

なのに彼女 真桜だけは一足先に“試練”へ挑みに許昌へ向かっ

ていた。

彼女の“試練”は

右手に持つた竹簡の続きに目を落とす。
勿論、無駄な“前振り”は飛ばして。

さて、肝心の本題や。

ウチに与えられた“試練” ゆうのはな…
ある意味、必然
そう、必然なんやつ！

云うなれば“宿命” つ！

“稀代”の“絡繰り師”：

李曼成の負いし“宿命” がこの“試練” へ誘つつ！

そう、これは“天命”：

“絡繰り師”としての才を生まれもつたウチに対する“天命” なん
や

と、自画自賛が暫くは書き綴られている。

勿論、書き手も、読み手も“似た者同士”：

故に“無駄な文句”を読む“苦痛”は無く

「せやろ、せやろ」

寧ろ“嬉々”としており、満足且つ得意そうに笑顔で一人頷いている。

余談だが、此処だけ何度も読み返していたりする。

と、そんな“無駄話”は脇に退けよう。

そんでや、そんなウチへの“試練”はな…
ある人を倒す事や。

その人つちゅうのは

姓名は樂戯、字は手然。

あの“大絡繹り師”や。

けどな、“倒す”言うても“武力”でやないで?
あの方に“挑戦”するんや言わんでも判るやろ?

そう、“絡繹り”勝負しか有らへんわなつ!

ちゅう訳やから頑張りや。

と、最後は投げ遣りな終わり方をしている。

何と言つか…

あまりにも自分“らしい”熱の沸冷に少し凹む。

「……うん、アレやね
もつかい読み返しとこ…」

勿論、自画自賛の所を。

そして、気分を盛り上げて頑張りつ
そう自分を励ます。

そんな感じの真桜だが…

彼女だけ先行した理由には“作業時間”と“遭遇率”が配慮されて
いる。

楽手然は“大絡繰り師”と名を知られているが…
同時に“放浪者”としても非常に有名だった。

作品自体は稀少とは言え、市場に出回っている。
だが、製作者本人に出逢う事は極めて稀…

故に、華琳は真桜の内容を知ると直ぐに動いた。

勿論、他の娘の“試練”に関しても同様だが。

そして、楽手然の居場所の報告が入ったのが…

“天遺想祈祭”の四日目の朝の事だった。

真桜は即座に準備を整え、陳留を発つた。

楽手然の居る許昌へ向け。

「せやけど“びんご”大会”は参加したかつたわあ…」

“隊長”が皆で楽しめると発案した企画で…

縦横各五つ、合計二十五の数字が書かれた木札を予め皆に配つてお
く。

そして、一から三十までの数字が書かれた球を司会が引いて発表し…
縦・横・斜めの何れかにて数字が揃つたら“びんご”になる。

“びんご”になつたら声を上げて特設の舞台に向かい木札を確認さ
れる。

木札の“びんご”が成立と認定されたら、引き替えに用意された豪
華な賞品から一点を選び貰える仕組み。

自分の木札は廻に預けた。
後はもう祈るのみ。

「…ホンマ、頼むでえ…」

無駄に真摯に咳き
遙かな蒼天を見上げた。

許昌

陳留を発つて二日目。
漸く到着した。

“荷”が無ければ半日程で着けるのだが…
それが重要なので仕方無い事ではあった。

「さて、とつととあの人を見付けんとなあ…」

愚図愚図して発たれたら、“大将”に“掘られ”ても文句を言えな
い。

「ウチの身体は

“隊長”だけのもんやで

思わず声に出てしまひ。

だが、直ぐに羞恥から顔に熱が集まる。
自分で言つといて赤顔していれば言つて詫も無い。

う…………あ…………

などと並んでいると、耳に遠くの喧騒が聞く。

周囲を見回すが……

取り立てる程の“違和感”は見当たらぬ。

ひゃ…………ああ…………

しかし、声は確かにやる。

「…………何やの?..」

一体何処から

右手に“螺旋槍”を構えて再度視界を巡らす。

前、右、左、下、後ろ

「ホンなら」「

勢い良く見上げた蒼天。

其処に、小さな黒い染みが落ちている。

染みは急速に広がり

「　　上?、つてえつ!-?、

うえええええーつ!-!-?、

染みは“人影”になる。

「きやあああああつ!-!-!-!」

悲鳴を上げながら“落下”してきた“人影”に意識を奪われ、回避

が遅れる。

結果

ドッ　　ゴオオオンツ！――！

轟音が響く。

朦々と舞い上がる土煙。

何とか“螺旋槍”で受け、直撃は免れた。

「痛たたたつ…

今、一体何やったん?」

衝撃で飛ばされ打ち付けた後頭部と臀部を擦りながら立ち上がり…

状況を把握する為に情報を集める。

周囲には被害らしい被害は見当たらない。

自分が受けた事で周辺への余波は生まれなかつた様で一安心する。

(これも“隊長”の教えた事やうなあ…)

胸中で呟く。

まだ義勇軍の頃の自分なら受けずに“逃げる”所だ。

自分が特別な“力”を持ち“戦う”事が出来た。

ただ、自分の“力”は命を奪う“戦”しか出来ないと思っていた。
けど、自分が持つ“力”は心に“勇”を以て振るえば誰かを守る“
優”に成ると“北郷隊”に入り“隊長”から教わった。

詭弁に聞こえる言葉。

だが

“信念”と“覚悟”の意を“霸王”と“隊長”の姿を見て学んだ。

“力”と“志”が融け合い心中に“不屈”的“槍”が生まれ、宿つ
た。

それは

今も、心に在り続ける。

少しばかり、感慨に浸っていた思考を戻す。

土煙は大分收まり、視界も戻ってきていた。

其処で、ふと気付く。
奇妙な“違和感”に。

(……何でや?
何で誰も騒いでいるの?)

こんな目立つ状況なのに、住民は誰も騒いでいない。

だが、気付いていない筈は無いのは向けられる視線で確信が持てる。

なら、どういう事が。

考えられるのは

住民は“見て見ぬ振り”をしているという事。

しかし、此処は何処だ?

許昌　　“魏國”が一都。

“霸王”の国で“それ”は考えるだけ無駄。

となると

(…まさか“日常茶飯事”つちゅう事なん?)

そう“前提条件”を置いて周囲を見直す。

住民に浮き足立つ様な所は見受けられない。
寧ろ、気にしていない。

皆一様に“慣れた”感じを滲ませている。

「…あいたたつ…」

また失敗しちゃつたあ…」

（いや、“また”つて…）

土煙が晴れ、地面に座った人影から声が発せられた。

胸中でツツコミながら側に近寄る。

「アンタ、大丈夫やつた？」

怪我とかしどらん？」

露になつた姿に驚く。

背丈は風や桂花、朱里達と対して変わらない位。

薄緑色の髪は一つに纏めて思春の様に御団子を作つてゐる。

焦げ茶色の大きな瞳をした少女が此方を見詰める。

「あ、はい、大丈夫
」
「う見えても頑丈に出来てますから
」

” そう言つて右腕を曲げると“ むんつ！” と、気合いを入れて“ 力瘤 ” を作る。

「おおーっ！ つてえ、全然出来てへんやんっ！」

反射的にツッコミを入れてしまった。

11

大きな目を更に見開き呆然とする少女。

と、その双眸から涙が溢れ出す。

「えええつー!?

あまりに予期せぬ事に驚き狼狽えてしまつ。

（泣かせたんつ！？）

ウチがこの娘ん事泣かせてもおたんかつ！？

ツツ「なんだだけやの兀ー！？

何でやねんつ！？

理不尽過ぎやるーつ！？

罪悪感、責任感、芸人魂、無情さ、理不尽さ……

あと、“隊長”への同情と自分の内で、色々な感情が交錯する。

「あ、すみません
嬉しかつたので、つい……」

「嬉し涙かいつ！？
紛らわしいわつ！？」

また、反射的にツツ兀ー！？

“やつてもうたあ……”と、その場で両手・両膝を着き頭垂れて後悔した。

此処が許昌

魏国的主要都の表通りだと忘れての行動。

一人では、退くに退けない状況に今更ながら後悔。

（……やつぱ、ノリ任せはアカンな…）

反省しながら、事態にどう“オチ”を着けるか悩む。

「あ、あの…大丈夫?」

恐る恐る話し掛ける少女。

正に“天佑”だと思った。

「ええねん…
ウチの事は放つといて…」

態とらしく、自棄になつて拗ねる様な態度を見せる。

普通なら見逃せる訳がない状況を此方で整えた。

“策士・李豊成やね”と脳内で自画自賛。

何故か、“はわわ軍師”が拗ねて、怒っている様子が脳裏を過つた
が
気にしない。

「あ……はい、判りました」

所が、当の少女はあっさり放置を決め、気配が離れて行くのを感じる。

「いや、少しほは構つて つて、何やつとるん?」

慌てて顔を上げると……

少女は土煙の中心地だった辺りに散らばる“何か”の“残骸”を屈んで拾い集めていた。

「片付けと回収ですが?」

少女は“それが何か?”と首を傾げている。

まるで“遊んだ後は”的な当然の事の様に。

「いや、そやうのうて……

“それ”は何なん?

何や……“鳥の羽”みたいな形しどるナビ……」

そう言いながら少女の隣に屈んで“残骸”を見る。

粉々なので全容は微妙だが“想像”するには十分。

脳内で組み上がるのは

「……空を飛ぶ 翼？」

「 つー？」

つい、考えが溢れた。

少女は何か驚いているが、真桜は気付かない。

ただ、少しだけ…

自分の言葉の“違和感”が拭えないでいる。

(何かちやうねんなあ…)

何が違うのだろうか?、と齒んでみると

「これは“滑空翼”です

少女から“それ”的名前が告げられる。

「……滑空……ああつ！」

空を“飛ぶ”翼やのうて、空を“滑る”翼なんか成る程なあ……

せやから妙な“違和感”が有つたんやね……」

自分の感じた“違和感”の正体が判り納得する。

“飛ぶ”ではなく“滑る”なら“構造的に”無理無く説明が付く。

一人で頷いていると少女は徐に立ち上がる。

「私は楽戯、字は手然……

貴女は一体何者ですか？」

眼前の少女の放つた言葉に今度は真桜の方が驚く。

「楽手然て……あの……？」

「えつと……

“放浪樂”や“醉狂樂”と呼ばれる“楽手然”です

少女は苦笑しながら答え、此方を見詰めている。

深呼吸し、思考と気持ちを落ち着かせると…
少女を真っ直ぐに見返す。

「ウチは李典、字は曼成
“大絡繹り師” 楽手然殿に“絡繹り勝負”を挑む為に此処へ来た者
です」

先走りそうな激情を抑え、静かに宣戦布告する。

「李曼成……確か曹孟徳の御抱え“絡繹り師”…」

少女は“值踏み”する様に此方を観察する。

いきなり勝負を仕掛けたり“受けて貰える?”なんて訊く様な無粋
な真似はせず彼女の“返答”を待つ。

「……うん、良いよ」

「……つ…ホントですか？」

叫びそうになるのを堪え、冷静に確認する。

「ホンマ、ホンマっ」

彼女が笑顔で肯定した事で一気に緊張が解ける。

「あつがとつゝぞれこます

楽手然殿

「 繰主くじす」

「 へ?」

田を瞬かせ呆然とする中、彼女は右手を伸ばし胸へと触れてくる。

「私の真名は繰主
貴女は私と同じ根っからの“絡繰り師”…
だから、真名で呼んで
あと、敬語も要らない」

ドキッ…と彼女の触れる胸が高鳴る。

尊敬する“師”に認められ真名を預けられる
これ程、光榮な事は無い。

「…ウチの真名は真桜や

手加減せえへんで、繰主」

彼女の手を右手で掴み取りしつかりと握り返す。

「ふふつ、勿論

真桜こそ舐めてたら痛い目見るからな？」

繰主は楽しそうに無邪氣な笑みを浮かべた。

「ほんで

何処で勝負するん？

街中は流石にアカンやろ？

やっぱ街の外なん？」「

手を放し、周囲を見回して繰主に訪ねる。

「その前に聞くけど…

勝負内容は“絡繰り人形”でいいんだね？」

「そんなん当然やろつ！

“樂手然”言うたら何より“絡繰り人形師”つちゅうのが“絡繰り師”としての常識なんやからなつ！

それ以外の腕前もスゴいで聞いてるけど…

一応、ウチも“絡繰り師”の端くれやつ！

それに…

相手の土俵で挑むつちゅうのが礼儀やしな

怯む事も、自惚れる事も、躍起になる事も無く…
相手を尊重し、敬意を払い全力を尽くす。

それは“あの乱世”を戦い生き抜いて“学んだ”事。

相手に対し欠かしては
忘れてはならない

“戦う者”の姿勢。

繩主は意外そうに田を丸くして いたが…
嬉しそうに田を細める。

「…ふふつ…うん
最高だよ、真桜つ
」

繩主の言葉もいつの間にか碎けた喋り方に変わった。

きっと、これも認められた証拠なんだろう。

「街の東側から外に出て、山の方に少し行くと野原が有るから其処

でやわらひ 「

「ア解せや」

「じゃ、私は“用意”して行くから先に行つてね

そう言い残して繩主は踵を返し“残骸”を抱き抱えて走り去つた。

「…………アレつて結構な量有らへんかった?」

独り疑問を呟きながら…

季衣や流琉と“同種”か、と類を引き響らす。

「 つと、呆けつとじてたらアカンつ！
ウチも準備せなつ！」

我に返り、持つてきていた“荷”を積んだ荷車を引き言われた場所へ向かう。

許昌は魏国的主要都らしく賑わっている。

但し、表通りを中心とした“商榮”のみを指して言つ“賑わい”でない。

老若男女を問わず、笑顔で生活している

それが、“魏”に於いての“賑わい”である。

まあ、それを“当然”だと思っている事自体が…

“魏の将”である証。

街を東側へと向かいながら歩いて見れば“警備隊”的姿を見付けた。

「あ 李典様っ！」

声を掛けて来たのは以前、陳留の警備隊つまりは“北郷隊”に所属していた男性。

報告は受けているが…

直に元気な姿を見れて安心したのが素直な感想。

三国統一前

赤壁の少し前に魏の各地へ向けて展開した…

治安改善及び警備体制法の拡大計画の第一段階として此処へ赴任した。

許昌

連合結成の少し前に加入し自分が調練を受け持つた事も有つてよく覚えている。

警備隊の中でも“隊長”が総責任者に就いた頃からの古株が居るに

も関わらず、“隊長”的選出には自分も驚いたが…
結果から見れば“抜擢”は大正解である。

第一次以降の“抜擢者”も確かな成果を見せている。

古参の者は“指導者”には向いていても…
“共有者”には向かない。

ある程度の経験値を持ち、“未完成”な者だからこそ“共に、築き上げる”事が出来る。

“隊長”がそうだった様に大切なのは
“同じ未来”を想い描き、手を取り合つ事だから。

そして、“隊長”的だった“種”は魏の各地へ広がり芽吹き始めている。

“笑顔”という花を咲かせ育み守る為に。

街を出て、少し山の方へと進んだ所に目的地と思しき野原が広がっていた。

ざっと周囲を見回し地形を頭の中に入れると、
“戦”を知るが故の習慣に思わず苦笑が溢れた。

思考を切り替え荷車を解き“荷”を下ろす。

“自信作”と言つても過言ではない出来。

しかし、不安は有る。

何しろ、相手は繰主…

あの“絡繹り夏侯惇將軍”を世に送り出した鬼才。

彼女の“模倣”が

自分の“業”へと至れるかどうか

“昇華”の時

「やつ、待つた？」

格好付けていた所へ陽気に声を掛けられて、気持ちが若干、盛り下がる。

が、直ぐ様、気合いを入れ直す。

「…いんや、わつき着いたばっかや

そう言いながら振り向くと繰主が立つてゐる。

「なり、良かった
わつ、始めよ」

そいつ言つと、繩主は背後に有つた荷車へ向かつ。

「やうやう、 真桜

正確に訊くの忘れてたけどこの勝負

“自動”で良いんだね？」

「 つー」

その一言に顔が強張る。

どう反応していいのか困り呆然としていると

繩主はクスッ…と笑う。

「さつき持つてた“槍”に“氣”を利用する絡繩りが仕込んで有つたでしょ？

だから、貴女は“此処”へ辿り着いてる 違つ?」

自信満々に訊ねる繩主。

その表情は見覚えが有る。

容姿は全然違うが…

醸し出す雰囲気と

身に纏う存在感は

“霸王”的“それ”に酷似している。

（……ああ、“大将”でも“いつ”言つやうやうなあ……）

相手を揺さぶり
その真価を問う。

“才有る者”を田の前に、未だ見ぬ“輝き”へ想いを馳せ、心を奮わせる。

（けどまあ…
ウチかて伊達に“霸王”的将はしてへん
こんな 慣れどるで）

自然と口元が綻ぶ。

気が触れた訳でもなければ余裕の笑みでもない。

ただ、楽しくて…
ただ、嬉しくて…

心が躍つている。

「…違わへんよ
ウチが挑むんは

この“自動絡繰り人形”の勝負で合ひうてるでつ！

そう答え、“荷”に被せた布を右手で掴み
臆する事無く繩主を見る。

「これがウチの

李典式・自動絡繰り人形の“自信作”

銘は一桜やつ！

声も高らかに

右手を引いて、覆っていた布を取り払った。

隣には彼女自身に良く似た姿の“人形”が有る。

“違ひ”と言えば…

髪の色が“焦げ茶色”で、着ている服は“白”を基調としている事
だろう。

「へえー…

繩主は“一桜”を見詰め、僅かに目を見開く。

其処に垣間見た感情は、“期待以上ね”という種の良い意味での驚き。

そして、繰主も傍らに有る荷車を覆う布に手を掛けて楽しそうな笑顔を向ける。

「真桜、紹介する
我が助手にして傑作
名を魅縫みくわと言つ
「ひ」」

バサツー！、と宙を舞う布。

露になつたのは
黒髪を靡かせ、威風堂々と佇む赤を基調とした衣装に身を包んだ女性の姿。

“見覚え”の有る　否、それは“本人”と見間違つ程の精巧な出来映え。

「…しゅ、春蘭様…」

思わず、彼女の名を呟く。

“魅縫”と呼ばれた人形は春蘭に酷似していた。

「真桜、違つよ

魅繹の原型は「き友」

尤も、彼女が 懇将軍が似てているのは当然

我が友の“娘”なんだし」

「へ？」

わらつと言われた爆弾発言など氣にもしない繹主。

だが、此方はそう簡単にはいかない。

頭の中が混乱する。

（春蘭様が絡繹りで…

そのお母さんも絡繹り つて、ちやうちやうつ！

繹主の死んだ友が春蘭様にそつくりで、それは母親似の春蘭様で

）

頭を抱え身悶えする。

だが、次の瞬間

「真桜」

「つ！？」

静かに繰主が名を呼ぶ。

同時に 叩き付けられた圧倒的な“闘氣”に思考が真っ白に戾され…

瞬時に繰主で塗り潰され、身体は反射的に身構えた。

その様子を見て繰主は闘氣を納める。

「考え事は後で、ね？」

今は “私達”を見て」

“勝負に集中しなさい”と繰主の眼差しが語る。

一つ、大きく深呼吸。

余計な雜念を吐き出す。

(さあ 集中しつづけ…)

キツー、と繰主を見据え、“一桜”を起動させる。

「ほな 行くでえつ！」

声と共に“一桜”が駆け、“魅繰”へと迫る。

「行け、魅縲」

縲主の静かな言葉に応え、“魅縲”は一步前に出る。

“一桜”の振るつた右手を“魅縲”は難無く受け止めそのまま腕を掴み振り回し始める。

“一桜”は左手で“魅縲”の右腕を掴み強引に身体を引き寄せ、両足で“魅縲”の身体を蹴り飛ばす。

一端離れるかと思われたが互いに掴み合つたまま手を放さず睨み合つた。

武将達の動きに比べれば、一體の動きは緩慢に映るが常人の域で考えれば十分に凄いと言える。

膠着は長くは続かない。

“魅縲”はクッ…と肘と肩を使い力を往なす。

体勢の崩れた“一桜”だが掴まれたままの手を放さず右足で地面を蹴つて飛ぶ。

“魅縲”の頭上を飛び越え着地に合わせ、膝を折り、勢いと体重を利用し

“魅縲”を引っこ抜く。

“一桜”より体格の大きい“魅縲”が宙を舞つ。

綺麗に投げ飛ばされ

ドドオーンッ！と轟音を響かせ、地面を揺らした。

舞い上がる土煙。

それを風が吹き払う。

晴れた視界の中

縲主の傍らに事も無さげに佇む“魅縲”の姿。

だが、先程とは違う。

“余計な物”に目を見開き“一桜”を見遣る。

“一桜”的右腕は肩先から無くなつており…
“魅縲”的右手に有る。

「此処までだね」

縲主が“終了”を告げる。

「ま、まだやつ！
まだ つー？」

慌てて“続行”を訴えるが唇を繩主の指先が塞ぐ。
一瞬で間合いを取られた。

「真桜、勘違いしない
確かに貴女の技術は高い
でも、“源氣回路”を使い熟すにはまだ足りない
だから、時間をあげる
期間は うん、十日
その間、私の元で学び業を盗んでみせなさい
そして、改めて“決着”を着けましょう」

繩主は穏やかに微笑む。

それを見て理解する。

最初から この一戦すら彼女にとつては“試し”に過ぎなかつた
のだと。

そして、自分は“合格”を貰えたのだと。

「……了解や、“師匠”
宜しうる頼んます」

姿勢を正しゆうくつと一礼する。

「うん、楽しみにしてる
それじゃ、取り敢えず私の工房に行こつか」

繩主は笑顔で承諾した。

真桜は繩主に案内され…

一路、彼女の工房へ向かい“修行”する事となつた。

第四話 真桜の試練（後書き）

次回更新時に消えます。

御待たせしました

中々、纏まらなくて時間が掛かりました（・_・；）

各“試練”は2～3話での構成を予定しています

また真桜の試練終了後には閑話として“ビンゴ大会”を予定しています

“見てみたい”との反応の有無で量を変えよつかと

有れば5p以上

無ければ3p程度かと

ご意見・ご感想を
御待ちしております。

それでは、また（^_-^）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2435p/>

胡蝶冀譚 想依儼輝

2011年6月18日08時34分発行